むかしはなし　上

ル 4
3823
1

む蔵の紀要一之巻上

御城内
古城
新堀の城
長井乃城
西の窪の城

山
紅葉山　東叡山　御殿山
和田外山　道灌山　待乳山
甲山　赤根山　青山
八山　丸山

坂
長坂　雪坂　榎坂
行人坂　妻夫坂　不動坂
金剛寺坂　鶯坂　菊坂

門 ル 4
號 3823
巻 1
早稲田大學圖書館 昭和 26.2.9

梨の木坂
唐風坂
浄留利坂
法眼坂
道雲坂
塩見坂
安藤坂
小坂
古内坂
南部坂
冬青木（もちのき）坂
かゝ坂
車坂
逢坂
梅林坂
紀伊国坂
江戸見坂

谷

かせぎ谷
茗研谷
大上谷
千日谷
地獄谷
茗荷谷
戒行寺谷
清水谷

窪

大久保
西窪
川田久保
蛇窪
日南（ひが）窪
傾城窪

谷

市谷
四谷
雑司谷
千駄谷
幡（はた）ヶ谷
入谷
谷中
下谷
世田谷
三谷
渋谷
比々谷
碑文谷

川

隅田川
江戸川
小神田川
須田川
玉川
文戸川
浅草川
宇田川

嶋

永代嶋
柳嶋
佃嶋
三川嶋
牛嶋
霊巌嶋

堀

新堀（しんぼり）　八町堀

井

極楽井　螢の井　堀かねの井

柳井　桜町の井　亀乃井

[illegible]井戸　由比の井　菜の井

むさし紀行一ミちの序

遺佚して怨ミ淺ハ淺茅の隱士の氣味あり
陶々として樂あるハ田舎者微官の意風之
あら海川しの梓くさらを回りの海にし
人のうごく雲に走さりて沿う川て
ハうかれきを鼻なまめてハ知ふ春をも上野
の花小酒盛にして日のうしろさまをたれ
まひ姉ハ玉川ある水子[illegible]を藤みして永
紀夜をともなう友として経楼の志風りく

陶々舜といふ庭也士出世侠と云ふ酒道者ハかうよ
みの知音なりけりき笙をふきむくは遊つきたちし
遺侠ハ奇ならむ事をたのしみとして貫之か雲
にもまぬといひしを我奇に今ハ蕪乃本此下
風こおもひ定家卿も愛れられし橋の詞も我旅にあ
らせハわりきめ横雲のたしかなるやに招し候
陶々舜ハ詩を作りたくさみとして杜子か
詩篇楽天か文集と桂林乃一枝崑山の片玉と称
せらいはの沼母かうらかん自も目もまちあし戸所
城片を見物せん出て同じく今もいへ会く是にま
寺てあかく桜町乃見付れ御門をは東都口乃御門
といふ志をハ戸所とうして乃らむ今の桜町に
膳部まおといひし者段の屋敷組の同心れ家多

しゆへ本まれ口といふ今うさし町四丁目れ南松平出
羽守綱近乃屋敷れ庭ゟ向て西ハ右の本郷か屋鋪と
櫻赤坂の見付れ近所今本伴井掃部の中屋敷
を本蔵山といひしも膳ア本郷が山ゆへなり桜
町の御門より松原小路小御しかゝり南を見返ハ
紅葉山遠侠かたし
出人日も暮ぬむしろのへあり紅葉山を此名称の内来迄
陶々舜を口にまかせて詩作て曰
御見金城朝暮間　巍然神廟照人寰
五雲映日深林上　自是四時紅葉山
東ハ御本丸数千丈乃石垣ハ刀をたてまつり見をあてた
ほらく貴十尋れ御堀を底深くして碧潭乃
おもしく竹橋の御門を出平川口御まで一見て御堀

にそひて行程ハ大下馬前に出るなりけ所ハ執権た
る人の屋敷にて御門もあまた大勝掛也その前ひろ
くして武蔵野も見るに似たりむかしなれとも正月の
事ハ中にかけたる大名小名出仕の日ハ供の者ひ
とつまりて尺寸のあきも間なくたゝし合しかは挾
箱をひしとも刀脇指の鞘もぬくることも御政道なり
ことに入るの外口論もなかりし龍の口とかや御城の水落
し道橋より東へ銭瓶橋より常盤橋ハ大和橋ともいける
まてはしへ入なり和田倉の御門の前を流るゝがかし岸を
いふ首藤ら三八宮安針とて三人の唐人ありしに屋
鋪下されしを今藤らか河岸八丈町安針町といふ
河岸をさて南へ行ハ比丘谷の御門右ハ不明の御門
といふ今も往来自由にして馬場先の御門といふ

け御門より見へ入れハ西の御丸の下は老中の屋敷棟を棟
軒に軒をかさね見るやかな御事ないふ東西に車馬交
地を道ること川流へし梅御城を見られは三重二
重の御櫓高くそひえて落日あさらかなれハ隠そ
こもて万雲に入るや作りなりしとかや御事をおもひ
はゝん鯱の上りは雛鶴が千とせの春秋遊
べき御城の亀は万歳をとめへて無窮とうかんた
る志るみれはハ縁をうるぬか御代を祝し御
城の水は清く汲ても尽せぬ代をまもり候
ふらむ

此の殿の松乃に折ふしきて八とせかみの風もいく千代の声

抑け御城と申ハ太田備中守持資ゑ名を道灌鶴千
代より入道して道灌と号し武州荏原の郡ホ

川の縁になりしか菅沼の告ありて豊嶋(としま)の郡にハ
戸れ此千代田宝田祝乃里といふ所を以て城を
取給ふ康正二丙子の年より始めて長禄元丁丑乃
年四月八日まで功匠の功を畢ぬ　東ハ滄海漫々と
して門まで万里の船をはすへしも又西ハ高嶺(こうれい)
連々として窓まで千秋の雪をふくむとも河は下
武蔵野を流れて土地よろしきハ物として一川にあらざるな
此事より道灌此城を静勝軒と名付て増々なりて是
四方をなかめ
我原松原とありて海遠く富士の高根を前に臨みてそ見ゆ
詠しかけの名我朝にもなきあるへしと自慢せん
北ぞこぬとかやさて扇谷巾ぬまとめされて菜の松乃せ
かくぞなりおれたるさて八松を頭巾松と時代に語りて

今ハなしとぞ　右此橋乃脇に今三重の門橋ありて別に
を富士見乃櫓といふ此屋しき乃上書元の梅林まで頭巾
乃かたりしハ桜の木此しも今にその桜ハあるといふ

江戸城高不可攀　我公豪気甲東関
三別富士天邉雪　收作書油幕下山

とふりぬりしを道灌此城よりまて時の狂歌の詩なし
内桜田乃御門を此北方に見なりし西乃御丸を西に見て外
桜田の御門を出る此御門より南へ行せ浅野氏松平綱晟
乃屋敷と黒田氏松平右衛門佐光之の屋舗此あるなしの道行
のほり此坂を霞が関といふ或人のいふ此名ありてハ昔此方
黒田氏其屋敷の南乃方の坂虎此門あるも山王へ行坂を
すゞ海が関といふといへりさかりうるし古きぞ今の桐馬
淡路国の屋敷までも海にうつし岸乃松生茂りたるよし

旧記にみえたりし古老の云けり霞か関より見わたせハ滄海
迢遞として水気長天とひとしく舩楫日夜たえず
と浣花老人乃作りたりし詩にかなひけり漁艇賈客
は一片の帆を風にまかせ欸乃の声きこえけるなれと
渚の鴎ハ去りかにして玉藻乃床にうき枕をさだめし
らて旅ゆく人を待がほなりけむ
渺茫たる雲のかたも見渡されて霞か関にたちとゞめよ
陶々然と詩箋を

坂頭眺望海天間　本願寺高雲外閑
徐支吟笻帰去暁　武城春色入霞関

それより永田馬場へ出て山王権現を拝しまゐらする山王権現
と申ハ当武州川越小仙波にまし〱けり上代ハ仙波仙
人寺と云し古跡なりけり慈覚大師寺跡を経ひ多

星野山無量寺と名付給ひて天台仏法繁昌の地なり
其後法滅中興して小院中院とて三拾余ケ寺いらか
をならへ学文修行乃霊地なりしか文明年中大
田道灌江戸繁昌の鎮守とならすへしとて仙波より山
王を勧請しまゐらする所なり社ハ東向西南ハ山乃下は
溜池二王門を出て石壇をおりれハ東の方に坂をのぼれハ
一乃鳥居永田馬場へ出るなり右へゆきて左へ行ハ裏門
西かたハ茶屋あり其所の町屋をよぎて高貴の居あり裏
門より出て坂をのぼりすくに出へゆかハ貝塚に出る
を右へゆきて赤坂の見附にいたる此溜池の縄張江戸第
一乃御門とて古橋よりもちかに詠や漕る離る井此大
池その雲の霞ひ雪の光り八月花もかさぬる山やま
添し経ひし当世の高提ハありつまて並天ハなかなか見え

・高く繁昌をみるかたしくも建供かしむ
目にちくみちたれは雪すりし三国を廣る川竹の山の
赤坂へおりて山王にそひて東へゆけハ山王れうし溜池
へおる山場よりそひて山へゆきてその傍る坂を紀乃国坂と
いふ紀伊中納言光貞卿の中屋鋪此門にいふを左手に見てつ
谷の見付芝邊市谷乃山つその次牛込
れ山門乃橋まて八法華橋よりの坂さし世れかよひ給自
中あり此山場ハ先年紀庵松平陸奥守に給れてほり
ありしこと深江戸川をは堀へかりたし橋をかく神楽
橋と云此橋乃下れ水道の流へ落る坂あり音たかし竹
ちよ子若きぎんどろ見きれ橋とも別立慶橋乃下れ
そしろう牛込乃山門登へてより田安といふ柳巷にむく
大明神の中にあるを田安乃大明神と云是ハ平親王将門の

首をいふ神田乃大明神の北くに御俵藤太を遊ふ
て神田まて来り宮あそてたゝまゝに神といはひ神田
大明神と号し首を安古へ上り獄門にかけてこれを後む
ところこそもりき乃あるをいふ一所なりはむへしとて出念
へ下されしをはふ大明神とあるか見えありてあると云の
永亨元年太田道灌武州へ入間乃古城を三うり野し川
越乃城此乾乃方に氷川大明神ありその中に祭り
なそらへ江戸の城此いぬゐ乃方に久方大明神をいはひ
中とあり今は久方の大明神といふハ牛込乃下に田安
あるは久方明神をはたちへとありまりとるを平ま
あん須神をは久方大明神と中ちそる田安乃きち
にゆ社そしゆへもかさとう田安此大明神也
中ありよハ久方山此名をえし来にてむ山に正

八幡のやしろは久方の八まんと云ふものハ右の永享
記に法久寺大内殿とかけるは永享の時代にゝさ
まる記にあるとかや　東照大権現様御入国以後さ
たる記にてしかしや八幡の別当寺がいつくに此山を八
幡の山なり内殿は此山にしてけり此山をへ田安より麹町
にて(?)其此内殿へ小所の者ハ此八幡を以て産土神と
し田安ありて生まるゝ人ハ内殿を産土神と崇め
の出門といふハ代官町の出門の事なり此出口の出城を
より東へ行道ハ後河原より紺屋て下町のこし次第西よ
あゆみつゝきて上総山まてミゆる筋違橋海辺橋の乃
比出つる浅草観音堂なるし　又重の塔裏出門跡の寺
将軍町の五ケ寺並(?)寺出家般若(?)めぐらしぬる人ての月
正月廿六の夜七月廿六の夜月のあはれに似たると出(?)

さて海中より龍燈あかりを此出門前の庵にて済ん(?)
て右の夜々は貴賤男女むらがりて入りて　念仏鉦
打鳴月をとる人経をよみ思ひ思ひ小夜をあかす　老若
かの月の出る事さへ月の出るは殊に尊(?)すがりて見る
光りもちて服花の舩をうかへ龍燈しそうとて
頭をさげ手を合せなりけりくて夜をあかす　抑後河
庵といふものハ非田の庵と云ふ　権現様の御代
此所後河の出城下に屋敷して庵をおくへ持ちて(?)されは庵
出て庵を下されけるを後河庵と云ふ事の跡は今の
元大工町も皆田なりしを後世すくに道にして田地
うめ埋め地にて此辺を元大工町の道とし海
よりあがりて此辺をあつめ此大工町をにぎはせし
いまハ小舟なる舩を置て是つかられしも大切なりけらし

らすとの事とうけ給はる田安乃御門前より少し
坂北町を飯田町といふむかし飯田乃なにがし屋舗ありし
故ぞそれより堀端につきて行は清水御門なり此門へ入
て右乃方へつきて坂をのぼれば左はあたゝかにて夏ともなき
れすゞしき出女娘乃いはん方も果めるへとぶらうらうしむかし
広人け御つへ入て三宅地を廻(かゝ)る事ありて清水御門
乃前をすぎ雉子橋をわたり付橋の下は水の流るゝ鎌倉河岸道町乃
下水内藤上野殿乃屋敷北前を御堀へ落は江戸日本橋よ
是神田橋一ツ橋付橋北下は御落のうし済まで堀の御
入御堀なり　権現様御代の御時広人ゞ広北前御乳母に
下されし雉子鶴を付下小屋といを飼ひて入置ける故雉子(ひつじ)
橋といふとぞ　雉子橋の御門と云ふは付橋より押まへあたる
かゝやのつゞき一ツ橋也　権現様御時入乃使へは九木

乃一ツ橋しかりし由人よ今にその名おいふまゝ竹橋
ともいふその次竹橋ありて三宅橋まで有りその次神田橋常盤
橋呉服橋鍛冶橋数寄屋橋山下御門もあり是より東へゆきて西
北方の御堀ほりに従ひて行まで南へ行ば御門幸橋北御
門なり　此成橋よりいふ是北次に北御門

新堀（にゐぼり） 城ハ
谷中乃西の方を新堀といふ堀ハ谷中の感応寺の山つゞき
なり太田道灌のかまへて有る堀なり堀の跡今にあり 新堀
の事未み審らしこゝに志るす在所之
長井 赤坂の内今松平安藝守綱晟乃中屋敷を長井ちやう
堀といふ毛利別當寶迄が堀なりしと云
西窪 是も太田道灌のかまへし城の内と云 は堀山に道灌塚
までありところく残て見ゆされハ志るすおけ 城山今ハ土器
場になりてみなことごとくほりくずす むかしは下に小壺あり
て古仏乃数多一ツる安置に逮集此人法花堂と名付る
物とぞ 中比足利玉沢乃法花寺の僧日朝上人の持念
勢ときて是経の書并一躰をうつまりて死人の
一経縁をし免あまねく人を利益は嫁小糸家の祈願の

一 事ありて社檀を建立して當神を勧請せし則ち山號
當社山と云今ハ石坂家古跡乃地なりし左羅比求
にありて寺號はなし當社の社其後今の志んめい
乃地に遷宮ありつるとぞ後は東都の法花寺に
うつりたりし旧記にありと云人のかたりしや

山ハ

紅葉山 御本丸よりひだりの方に蓮池乃御門より御搭
めぐり四ツ此御門あり 蓮池の北のうち坂下の御門
より入て右の方に大木生茂りたる内に
東照大權現宮 台徳院様 大猷院様 厳有院様此御霊
廟あり 浅草智楽院より出家常に相勤て毎月晦
日に御経あり 毎月朔日十七日に伶人楽を奏す楽人は
山の井 安藤 東儀 太聡 同清猪 上野 左京 大神 豆井
上和泉 上原 織部 蘭 東上なり 正月元日に奏する楽は調
一越調(いちこつでう)や 其余は随て十二調子を奏するとぞ
東叡山 宮ハ東ふりの忍といひし名ぞ今ハ上野と云大門ハ
黒門といふ南へ向きより黒門乃前通ハ革屋ノ牛天神の
一 不忍の池なり志の池のそばに片町の茶屋あり

一 黒門を入てすくに桜のなるまれる鐘 武十家あり 西の
かたハ忍の池なり まるより一大弁山とだん木
其へ清水よくみゆり 眺望すくれたり 二王門也
二王門の前左のかたに鐘つき堂大仏あり 右のかたへ行ハ
最教院此寺のうちに山王権現まつりしむき 人独(?)
右のかたハ清水観音堂 此御本尊ハ主馬の判官盛久が
御本尊にて刀難除の懐の仏体を移し給ふ也 南北の方
舞台近く其下ハ桜此古木也 此堂に海北友雪がかき
ける絵坂の絵馬江戸一番の絵馬のよし にくし 此絵か
かうしは八見物なりしなり 二王門を入てより 桜並
並木松林左のかたに東照宮あり 中院ハ御門跡より
て石燈籠のならび立てる中をとほりまみえしの御門御本
ささまて 参詣しまのりしら 須年 又此門よりハ

参詣の輩いさきよし 右此松林のうちに塚あり 一尺程ま
て上ハ一本にて それより 女松男松と二本になりて 同じ
やうに相のひて 枝葉にえぬる松あり 是を相生の松
といふ 是より左ハつまんだう 此堂のうち常念仏あり 右の
方に大塔むかへハ常行堂と法花堂のあいだを橋にてかける 橋下橋
そのしたをとほりて此つゞきの此寺へつゞきて行ハ
厳有院様の御霊廟 寛有院様此御霊廟 朝御門堂
此つゞきに此道筋の寺々の前並木ともは大てい桜
なり 護国院も此方より文殊門路の御門前より東
へ行ハ慶凡坂へおりる此下に大勝のあるよし 大猷院様の
御霊廟 又慈眼大師の御家あり ぎんあら院中法は
あんぐ寺といひし此寺の北也 大猷院様御仏殿
附 御供の虎の石塔あり 元三大師ハ此寺に 宗まで

一 毎月上旬寺乃内よりかくあかる

御殿山　牛込榎久戸山の西を云小日向築地のはけ山を云り
四谷ら此地形を云として今ハすたれし此山なり又石川東海
寺此後ろを御殿山なり家にまへての枝御ら守る
大猷院様御鷹野へ出御あそハされは此殿此ありし故の
名なり

和田戸山　高田乃うちなり尾張中納言光友卿の御屋敷を
なりけ西に一本松ありそれ一本松をもうち当山の御
屋に志けらりて木ふ天神山ありしかにあらずりしと以下
まつりて家に七面乃明神ありけるが後に取り次の
山ありて大久保まて此屋敷の様に入て天神も七面をも移
地をかへまた地を移へうける

道灌山　谷中感應寺のうしろ七面の明神の山つゞき妙山
乃事や　岩剣といふ所ハ江戸よりも高を道あり按
ここに普請るといふ寺を道灌の菩提所なりとまた小日向
金剛寺といふ寺に道灌乃由緒ありて道灌山あるは小ふ東を
見るハ限りなくあらゆくとう見渡しなる所也　此山を
花ハなきにあれとも春ハ花見とて此山に群集して道灌山
乃西此山をせん多ん本と云此林のうちに不動の権現也
在し給ひりなは此ハ女悲将観音とも云ひて又足ハ弱也に太田
道灌乃屋敷を今此太田ねはうち此下に屋敷見之此屋敷の
内にけ権現乃社をしまし家へうれさるかありけるに人此
あるしに太田道灌此首を不動此権現といふさいはひあると云
しまつと来歴をきまつ

待乳山　金龍山とも云聖天山とも云此社をほを聖天の所へ本此
一 所を聖天町といふ江戸日本橋より仙花まて乃所ともなり

かいざうや山の東北町ハ橋場への道なり角田川へ行すぢ東
は浅草川なりまた社北うし行新鳥越乃橋より三谷橋と
堀川の向ひの山は古木乃松生茂りて敷石山なり仁王門
の下には茶屋あり　蓮池あり　辨財天の社あり仁王門の
前に石碑あり待乳山として其下に戸田茂睡への道恭光
と書て

あまたとハ夕越て行人をも見よと待乳乃山月詠そ玉葉
よみけり茂睡一子にたくれて安故招てこ玉に乃ぼりし
附大城乃眺望けんにも一首作らる石に切つきそへしとものし
玄院のあれしこは山の風景は勝にむすびかくしこの古
すゝいひたる二町ばかり北ハ浅草川より新鳥越北橋へ
三谷堀乃ながれ附ハ橋よりて見へわたりて山の眺望を
うち見てり山北茶屋ゟことある人の見るまでもなくて人皆

ぐへ笠をぬぎてしばし又ハ荒色乃おもかんの羽織をうちかけ
あをてゆききもなりかりあるくかりきり菜をつまむ
つたにてやみて見まりて宿を尋ねきてかびかなき新千
載集に

おほきたハ庵よりをこゝん待乳山夕越ゆけハあきなくもなし
とよみたるハ八まんあやまりじや人々そてきまそうちそうて
をさやしなんどくぬなとしきてうちをぬきちて行此山は
下総国の名所にいまり下総ハ浅草川を隔てさへハ
むさしの地なりつれなりけるたやすかずむ
いぶかひとぞ考此月を待乳山夕越ゆかてまつり詠めん
けまつち山の葉をみ天町みてよまんおとあこたえ柏本
ハ露やよりて菓子屋なり来候がしも
柏木ハすその露やうらぬれんとまんかくハ玉子ちるなり

かぶと山　海鐵橋を渡り牧野周防守のやしきあとその所
を云俵藤田秀郷平親王将門の首をうつて甲をそへて
是までおくられけるが此所にて甲をおとしたるを塚に築
こめて甲山といへり頃年まで此屋敷のうちあり
塚のやうなるもの見えて大木ありしが大火事の後そこなひたるゆへ
此この甲を此山にちなんで小あみ町へ所移したると云
ひのまきしといふと也

赤根山　赤坂今の紀の国の中屋敷をいふとぞ此所を
ゆうといふ由今紀の国坂といふは赤坂なりといふ
青山　赤坂の西なり青山氏の屋敷あるゆへ青山といふ
ねつ山　高縄の庵をいふ由紀清左衛門の古き後にあるならし海
のふちへ山の出さき八ツありそれゆへ八ツ山といふとぞ又
山の出さき八ツまでいふ是もてはやされしは八人の屋敷構ゆへといふ

丸山　本郷追分より右小石川の方へ通せられつれ北日蓮宗
本明寺といふありその明るき所に信人ましい多く乞食住居
して京の流藤のやうにて流藤とは名所のちなみにて
それは誰もなく人も皆いふ也

坂ハ

長坂　六本木より麻布あざぶ谷へおりる道也大久保加賀守大田原山
城守殿屋敷の間なるおひの坂を云此坂の下あてれはひを車に
てしのぼる也の坂なる西の坂なりまたあるも坂なれた
まみ穴坂とハいはずそれゆへ坂の方へいまだ泥むしきの
坂にまみ穴ありしとぞ　貉といふハ狸むじなの類と云
聖坂　三田乃三町目より二本榎への道なり光雲寺といふ寺
の上の坂を云
忍乃木坂　坂ハ寺町より門より切とをしの今地境の前
をとおり牧野駿河守屋敷前より今坂を云此坂なり
これハ草迄なりさくに泉ハ六本木へ出る右へ泉ハ西久保
左へ泉ハかへしけ町より芝へおりる也又ゑぬ池の上山口
飛騨守の屋敷の前の坂をも忍の木坂と云大きなる忍の

一本ありけ坂此とたぬ地の所にゐましく記す。
行人坂　目黒乃不動へ行道筋六月茶屋乃さきにあり
やうと坂　四谷傳馬町西ありのうち中の丸橋此下屋敷茶
云ふ今ハ坂なし昔さしもたる婦ふ此の主二人もと
しの家に住て行しゆへまけ名あり。
不動坂　関口むかしやしろ乃不動へあゆる所乃坂を云
金剛寺坂　小石川乃うら江戸水道乃川ばたに金剛
寺といふ禅寺ありそのうしろ此坂也此坂をのぼれハ傳
通院前の町屋へ出る
こひ坂　小石川水戸宰相光圀卿乃御やしきのうしろ深之さ
し町あたり春日殿町へおる坂を春日殿此所よりはち町への間
坂あり方をもふと飛坂といふ元ハ此所にさる多くして女わら
んべのまふまら差番をも舞さがりてとる逃へとび

坂といふ此坂の名を二の名といふ
えく坂　小石川よりな口六町目へ出る所の坂を云
なし此本坂　本明寺の前此道へつゞきて小石川へおる右の方此坂
を云此坂ある萬坂へも出る此あたりハ皆同心屋敷也去侯が
云坂と云字ハ去をあんにして反の字を華なり此反此字を
ハ久保ともみそげりともしともいふ語たるをいふなといひてを
去をそむくと讀てをかれてんありいづれも事ぞといへども陶る字
かやうく去侯も坂といふ事を去ての庵やけりや為の人
坂と云ハえりありまつさたる道を坂と云ふとなしおれ
まハあらすといふ去侯の文いふの体坂そてり坂といへハの故
所々係所々坂と云事必定ありといふ陶子いふきさそこ
そきて坐さるも坂と云の傍小上平下反といふのおり所く
に係所々坂といふまハあし山の坂のる成所ありてその注

すゞさえげなるを坂といふ此ゆへに文字にも書交なりと云
さらのぼり坂といひくだり坂といふも坂よりくだり坂へ
のぼりくだりかはるゆへといふ

戸隠坂　松平加賀守殿屋しきにつき榊原式部大輔の下屋敷
の裏門通りちの内すれ池のそこへ下る坂なりといふ

車坂　上野の常照院の前より下谷へ出る坂を云御門常
に大門ハ開かず小門はかりあく出入する笠印のとゝめ
なし此坂の下の町を則車坂町と云所なるか此坂は
まかりもせす急ならもせぬよきなり車坂と云ぞ理をつき
て言へしとも云ま侭なるハ此車坂ハ二筋ありやと云所なる
かいや此坂はかりて一つなりやとも云ま侭なるハ車二筋あれは
まわるへし一筋なるハ海へとてねえろつまといふ様な筋ゆへ風
すましく預り袖をとらはやかなれハま侭かよし

あちらこちらをめぐりてさらに車坂からくらひまはる勝をひくなり

屏風坂　上野慈眼大師の前寺詮院の脇より下谷へ出る
坂を云此坂ハ此門車坂と同し慈眼大師ハ堂の前乃金猫
なるひるのゑ名ある也　所なるか此坂をも車坂の少しに理経
つきていへともま侭小道へは猿くあんまをとも出入所へた
つるてこのけとも猿もさなるそしても
なりて見れはりてきぬとも云ますハ松島のある屏風坂

あかず坂　牛込より御粗の御門くへと続り去る内塀にそひ行
町あり永にて京よりまちなともおうち町へ上る坂を云なるし
たゞの御門乃此比小笠原の御みさご（みさご）といふへ武家名を並にして
けるへあり給ひしにけ所より坂つゞらといひてそくひろき
所あるしるを所々に松の木ひそやうりもとへてよりかさはるを
きりて来る一月日に給て常なるの先しになりてなる

乃歌へのぼり逢坂山の麓にとゞまり住居ひしが其子かつらが
事を其のまゝ日にまし衰ひよはくなりて死ぬべき
となれり我死なはむなしき躯をたまはりて子孫
にうつろひ行しかはりにほうむりしといひ置て後にむか
しく殿の秘密を其国と御門の事なれど下すまじき事なるい
ろく其逢坂山の麓にほうむりて此所をむかし戀と名
つけ来りしとや其子がつれも蝉丸是事をいひ置ありき
今其家ありし跡は神社のありける所にてありけるしに歌
其名若にまうせし此坂へ通ひけりて蝉丸をまもりけるに
見しにかはりぬ其月て其ともなく乞く来つくあ
ひるはひ語らせぬるより此坂をあふ坂と名付来る
とぞ 三条の大臣此名にしおはゞあふ坂山のさねかつらと
よみしは近江の国の逢坂を子孫へのいろ人によりてかづら

八女乃ことによる女此名にそはなし是ハむかし此国を
かはるは名なり嫁を其はいまでよしみしとたとひ
其の坂此下乃名にいりて死去り其のこの家ありて其
乃其の後切なりしてむなしきからをそれあはてく筋ひを
留よとぞ今の京町とい子ハ其の所はいの京ある永生は
家たきしゆへとぞ今かまよに尾張中納言光友卿此所
此所尾張の殿ハちゝぎ出海まで大きなる池ありてそのにあ
るぶ峯死する事なりしむかしハ此池今の京かつ
まそもるまへてしそありつるめ

上留利坂　同しかた町のうち田町とい女町よりあふ坂を
上もりし此坂此上にていや浄瑠璃乃芝居ありし
ゆへ名とす今水野出雲守光の屋敷ある所ハ浄瑠璃を
出語ある故名付たるなり是ハ虚説なり出雲守光の屋敷ハ其後

かうちさか名ハ龍さかすとすこし此坂の上に此尊道同ん
此所に宮に奥平隼人と云浪人あひてすと奥平源八と云
者の親なりしとて友同所記奥平源蔵なとゝ云一族
をかたらい三條五條ハしるし寛文十二壬子年二月二日此
夜当時ふにかしこみ門をやぶりたいまつをともして
切て入其時ハ親の敵隼人ハ何ゆへか留守人ありける
其隼人が親ハ其頃入道二男九郎兵衛かゝりてぞ人々を討ける事
御ハ知さ合て語さんとてふ人郎ホ入道丸合て此事
月の思ひのかなしきよひよそに討さおとしまつて一あるもまうちて
みすれし去るうち程にして程ホ又九郎兵衛を討留郎ホ
もあするに切殺源八かかくれしものも手負人わりあり松なりしふ
くさとハかうちさかとも手負をとつけ浄瑠利坂まで此
きられぬ夜ハかのくと明ホ宗り夜あけて隼人

家人を催しかくさきハいまさとも程なく行まし松川がきて討
留人と立院三騎弓鉄炮をもち新参十家人あつてつけ出
候に源八ハ手負をかへりぶちし牛込此清門の前を走川
ふのひて行隼人是を見てうらんげとよろこびて弱きをため
そこをのく時ハ源八と見るはひきめかまさなくもかさね小路
源を見んとするなりにけるし猪首をせりとしてれあまた
馬の上にて矢をいる事源八是を御覧して小のさいをひる
是人友此生能んで小ホ入とは此の事にてしあるへしそこ
あしなとつて人をせは隼人馬あと松かりきつて松て絶
あそあるをせ家ある是をつめとして源ホ源ホと切むすひ
松川流まくろけせあたりをあるいへこちらにて手傷も
あるへて首をとくもあり迷もれのまぬ所ぞともびかゝて
て後引分み彼しちうさき八致するもありすこそうるて

老ハあれとも引て弱き若ハ去りし木ハ牛也此門乃まへ〈附ハ
朔日此出るは諸人ハ主を囲つて見る事と出ニ出
川さる中なるハ晴りまりしき橋々や源八年八十六歳富
読しとにすゝれるらにこ限りまを京都ハこゝ方さ此を
くなるに色めく花の歩り神ハ吹ま風ふ云ふ事て多
こしめ多りし御庭の香ハゝるとさの多りしも白ふん
ゆしら川てハ志るとしめるを松さんて汝いてハさちあ
かり云ろくとこれハ飛ちがへまるきの花ふ多いも
畑の小蝶のとくや年人を宮まさいとも多かりしが源八
にほまたるしきめ去ゝ伊とりてしが田町乃下水のふ
か塚へまいりさりさい雨ふ荷ふる御源八つらひて花入松さ人
て首まいよりあるを見とりて年人が扇ふうち渡さまた
御老ともハいぼくとしあすて松ちうせる事とこれを云へ

老が往昔にしむ
かくまきこゝ上りり坂此とえ升相ものゝちかゞさ所ふり
右の源八郎花源庵氏花一筆をたゝさめらるゝ保さ此大藤へ
なりされしゆへと

左内坂　同しき町のうち此所ハ名代に浅田左内といふ
ものこれよりちか坂の中にやしきあり此ゆへ左内坂といふ

梅林坂　御城のうちに此所に昔天神乃社あり是ハ
太田道灌武州入国ありし城乃鎮守の天神を勧請せら
御祢乃みしれて天神とやハいほまの林中坐ありしと云ハ
去る明神社は祠乃多ならりて此扇とるがゆへに此宮
此うち掛絵もとも皆を扇ありあるすき八風ありて梅
乃気後去祢後ハ風なりて方地たしびきまさうさ其花
のくれるハなるを風にもふ引て用きたる月がくるよう

これも風にうけて今しきをはするそれより萩の
露もそのかさしるそて袂をそしき秋風にさそはれ行を
御神名は牛川比家にてたぐひなやその地へに在る神
名れ天神なりやそよし乃田面れ名も知さぬかり
君がかさにぞよろしなくたゆとまみすをとは所なり
ある人乃家に
天は越後れける人よりと聞てそかへ給ひし乃里
文明年中に川越より江戸平川へ太田道灌勧請し平川の天
神とや坂に並木乃梅をうへらましより此坂を梅林坂と
云 権現様江戸に入部の前平川より貝塚へ天神れ社を
うつされ今ハ貝塚の天神と云 松平伊豆守信綱と云ひ
れさいる人ともしハそれ才人に縁きさとくしそやうな
所に川越を知してる人家平川口に在家の役ハ孝ト皆

乃前うれなむなけ給ひけりや
法眼坂 二番町より六番丁への方る坂也むかし斎藤法眼と
云人のやしきは此坂れきはに有りけるゆへに名とす斎
藤法眼ハ今れ斎藤次右衛門の先祖や
南部坂 赤坂のうち黒田氏松平右京佑乃下屋敷れうし
ろにむかしは前に南部との屋敷ありけるゆへ也
紀の国坂 赤坂風呂屋町れ横町より赤坂山への方る坂を
云 此山今紀乃国殿の下屋敷となり西へ紀の国坂と云ふ赤
坂山への方る坂ゆへ此坂を赤坂といひけるゆへ今此近
所なる赤坂と云 又松平出羽守殿行橋乃御門へある坂
年も紀乃国坂と云今の原小屋の下なり麓より紀の
国のはやしまありしゆへ也
道元坂 青山にありて

高ちれ末坂　田安御門より少し行て元飯田町へ
おりる所の坂也此坂より大きなるけやき有
しなり

白鳥見坂　是ハ門より出る池を右にして今此所にて
御城主屋敷の前を通り松平大和守やしき之所あたり
左へきれて又蔵三丈あまり屋敷此辺の橋の下にある坂を云此坂
ちかくに白鳥をくりて見るに今の名と称すとぞ

堀見坂　梅林坂此上御本丸門の内也此所より海よくみ
へ堀の内より見渡されしによりて名付るよし堀
見坂と云し今ハ家居にかくされて海みえず

かぐら坂　牛込見付の外より北へ寺町へ上る坂をいふ

谷ハ

かぜだば谷　あざぶ一条町の通に上杉弾正大弼綱憲の中屋
敷の下や此谷にて松平播磨守殿下屋敷也昔ハ細谷播磨守と
いふ人をいひしよし故また今世に谷と云にやと思侍りしに或
説するに出家ハ此辺のとなりに住居し名ハ何とかいふ坊主
也経をよく読し故に此谷を名付て得利入道といひて名付
かれ住居する者ありしを知るにおもむきに従て居るにおまりけれ
入道ハ是も諸国巡礼の道にも出て後ハ諸国の道にも
をえらんで名つきしとぞ今ハなくてまたへされ
て此坂を上りて名のみ菓子をいひてもありし今の御法
う法りうれる世のさ道を読さ年くハ三河にて先祖
此をかう紀討死の合戦ちらくハ関ケ原大坂にて親祖父
のうせさいひ法りたる武士此人のけるゆへ誓ひ年

にきはゝえ又人に知らせてうりやまひしなりかくされ
しりてくさとし又のりをけりされ事なしと手にわたり
あらせて神をしけり今の世乃人ハ利欲ありて名過ぬ
く巧言令色なれハこゝろにしるしたる悪を偽飾招作書ぬ
しつりもされ其子孫ハ日ゝに滅し膚をに親子傷ふ
為れ一分をもなさずれハ先祖の忠勤一生涯の名をもけがす刀
にうまをあてゝ火をもしく失矢かけをひしいて焼つけとし
きらうしこの甚人まつり猶んてつ中さわりして身やまひされ今
は善勲利口のことの者にて武ハ正路のものを求むる人
なし主ともへ乗り乱このを求むる人へありしても伎善勲利
口ハ老弱以て求るゆへに侫奸利斗乃者を求て正善正
法乃武をもてざるなりしと云論ゝ有ゝ云左様ハしとる○そ
昔よもひさり武士の及武士といふものいはししる成ふ

侍ればはく武士といふハ武の身しなみもに守してものを云
るとへ力ゆるさしにわくまきありとを様や矢ハ根をすゝと
しのきびをもはあずに鐙馬をすきもはいかにもたしなみ早
縄太刀脇差無用なるを歯すてとかゝなりゐへかほしやうたは
とにてハあふ次ハ是ハ迚要なしたしなみといふをのはそれは是
道をすれハ中ハ町人へ身をも刀脇指をさしれハふくらさ人の
のきびをもつけたるるたるかさしる中はをの程ゆく
腕ぶしを投しとてみをし今ハ町人なみへ入をもり中ゝとの
を武士といふ中ゝさはましくもりをさんへ少武士にても身まへ
なる法掃も不如意なれはさびる乃刀脇指をさす事も
はさありしそけ人の侍ってなれはいふも体をしくは侍
れ主従乃法をのハ生れつきてこさゝらきさんなくは
ゆへはいまけいもさいかしのかとにこそいへ

ひとむきぶつ事をいたしたゝハぬゆへ人の氣をもいかさまに
様ミかしなりゆく家もかはらぬ事多くハ今はハそれし
をたすけ也ふ調法ものと名つきたる人ハ浮利くらしつゐに
世にてねしそすくなきもつゝ中には武士よは武士にはこちもよし
へありといふハしたをさするにはあるも昭あにかてちからさまた
てかくもんに継なく常住んの思さる人へハそれ此思を
きしはてさへりてんまいてすす儀きしたにおす、つくへ人は父川
てならしりまをもらん所ありてあるへくはを屋ハそいふをいへさ
まてよしさてくふれもひはまし誹諧のんそてやべくはこれ
はなの町人季吟（きぎん）とや中老理木（うもれぎ）とや書物を作り出しは
それよりみんな此句作り五人の句作りしらふとはこの有いは
月をなつ好て猿やはりゑる　諺て有頓猿や何し猿
衣はけ白文字一つの内ちがひあくうとも其の道を人か家

多くの人ハ有んすんれ句作りて出てんまいるへくは誹諧去
ぬ人ハあるてんあるましくは武士れかしへをかくのとくにては
刀脇指ハ百姓町人もさしやはは是ほ中間をも人をのぞん切やは
ら鉄炮弓馬を家中そのもそれく此藝をあり
武士といふ名ハなりし書物よみ智あ得そのハ武儒者出
家にあり力をおさえがんずなるそのハ日備れにも至
主君より大名れ知行を下されは武士といふ名はだ何の人
に仕ひそといふことをおもひゆへてをふ道てもんのせんさく
を謹しうしる事にもたましあはなされたるひともいぬ
それぞれまでたくなれめはとあひあるひハ人の心ハぬせが
俳諧も志のびてかりて見ん野山れ人へ本さき雨又ハらん三う
三日いぞるたなびく人をも夜るかりてそのとれわが去て俳ハいゐや
うにありしとんぬがしき見んだしろその上れ日事まで人とは

かく別ちぎりへこそしさ■なりやとこそしたり。はゝき木
もかく会ふ所へしねとこそ雨の夜道をしてんとするめ
きばねろかなる人の目にこゆるものハ見えて出して行を
見れ人のあやしきいやしくたのもこそるとも見えてへし
常にんをえたさとさあかしてけりんに心移つけしかとし
つけなれたるハ事とへ今雑踏ハ多く志てぬ物ま人なりとも
あらそてぬんあるへしあハ流るとも六　生まつきる所別縁
乃中になりしとなきぬとの見まで(?)へしとかゝれけ物語
兔せぬ谷ハもとにいくさ備中なれとも　将飢がかゝみ
とおもひ出ハもろたね楽

千日谷　さめが橋を渡り志まハ原へ行谷を云家に千日寺
見てゆへ志新の原とて永井信濃守ハ屋しきし今ハ此
屋しきをあまさにとて永井喜(?)ハ屋しきなり

戒行寺谷　四ツ谷戒行寺といふ日蓮宗の寺の谷をいふ谷
へ四谷伝馬町よりゆけば右のかたに錦綉山と蔵院といふ
真言寺ありけり寺のうちに坂本の観音堂ありこれは
越後の村上義清の守本尊にて一尺ばかりの石の上に座像
の正観音也けり石塔のくに宝ありて志めす寿昊のとなり
首義清村上没落の後その孫村上某といふ者道楽坊入道奥
州米沢にありけり寺の開山清人法印とふハ彼坊が
弟子なり道楽坊大坂御陣のみぎり江戸へ参り法
家へまいりけれども此法師なりけれはいさゝかなるは
人のうちけ寺にてくらし後水戸中納言頼房卿の御
たくひなき仏具ありとけふも貧比の寺なれどハ又門か
に一間四方の小堂のうちに安置す
花ぜん谷　赤坂松平先薩摩守信守殿の屋敷より掃地町

一ぢごく谷と云やせんなんする坂ゆへ名とす・
地獄谷　坂町六町目より二十丁へ行谷と云もしけ年ゝ
にてころされし子共のかばね又たひハ小あひたる世云へ
捨しや骸骨ちらくちらゆへ小いさ子供とき女の人
答國寺へ村法寺にゆきて夜ハいれもにし金
よのばらく法華ばらに為ちつくし済て払さびし
うたに生死流轉悪業煩悩にひかれて八中有にまよひ執心
の一念ハ去る生前にて亡魂と成て地なり見へどしみ法
なり済子も世供も人数ハまるじゆへして鬼文
て人に払すく風も身にしみなるやうん人かかれさ
にの亡魂れしと路かとひ出しまハ着れ人もて場なり
晴さはくらし雨ハ涙ぞやらいやしくひるさなしして
きびつるさはなにも文へ行りてこまらんとしてたなれば

そうかともりしや寺にといと遠ひして出る所もが
なれやともけれは小くてまいせ遠ハ男は義理ハせんなし
ひそ払もいさしいざゆへんさがいはゆんとたくすれとこ石
ともしゆみ一生の武道を出しおとハひくましいとってゆ
どもあられまハりぞくくしてひさぬいしらぬ法
念をちらしにしてせさだていきたりとしてさくに八石
ありおくにはがん木ありしおるぬるぞへ参りとゑらひ戸
をあきおくしとぬきあしそ坂をかるに萩れ下の
うたにつるさ水のおはる橋の下にして女は生みてひき
くたりくあれハまてさるゆといへ行はねしてたけ物ようぬ
めかんどしくさのあろへしからん日れさだ一口まされさん
とたりひふるとひろきさゞみはなく太刀ともあり
乱きもそうりらしなひつるやまうくれはへ参皆まて

ちさき契ありてむすぼくしと見えしてもこのよそ
一つ見しきしれ御子ハ刀のつゝにしるを尽けられと
もぬきそこゝろぐきんもなく主保ハ志むをたのミこり
出しかねもりしあらせへき力もなく二人なから主りぬ
にぎしどしるを出て人もなし彼だけ抱ちゝくあ鬼と
より抱申けりんといふ契につきそこれハこしれらハ母
計りとの見しうすげ声に[illegible]ろくはあまるがたけ
なる身をうち出してあらなるをはしくらゆ[illegible]白き
かさねに白き帯むし右手はえをつまた左手に榁の枝を
もちなうことをえらくとながす主保も御子ことえを
そそなりといひてけるくしゆゑひさこれあいさ何なる
しかれバすましにより手を閤きにすさ御じきもとるに
てひと人ハなそぞろしく思合けもねまれけてこそ事ハ見にて

こそだけれあてもはかなく人の身はそはかなきもまげけれんを
まげやられやますば後の代へつとそハ市谷の松屋のむ
すめにて生まれて生たちけるに父母のいとをしみをうを
やしなひりけるひかくこそんとも仕琴琵琶のならひま
て左りうかひ覚えては春ハ東叡寺の花の一本の桜をあ
しらひ上野谷中の花見をそて我身の夕月を見るにハ音
のぞくの山がらけもなくうけたまりんとまりとは知らし
うき世りうらみつゝさがまし若と頼ぐひ秋ハ旧雲もの将
に寄る三ヶ月の宵にまで三まくさいハ寺の新派なる絶て
我身の光りにそべあり明の月のはれなきのこゝろまで
けざくれそひよのまた雲にをしふられなうしと松の[illegible]
琴をまくべてこしこれハ高ふきて人々まで[illegible]
も家を論してくれつくれハ[illegible]

十七にして浅茅の庵所のなにがしが妻となりぬ一た
ひまなくしてもしぬらひれ人師しあさりし浜足をさゝんす
れふる人にまじへ影を鶴跡乃松にたらべ鶴をれあるを
うらたる妻腿乃あさりえもいられぬ事をなでさするる
とまにうし浜へうちすてすゞ庵もなくまあひ一夜ハふ
つさ一ツひハくらすいゆるあてハいざさつれ千夜百夜あ
ひましれど卑れらいきたつ・く月をいふされ去ハ
らくありて舟乃名のび笛ゆるまり耳れ根あはく
男汗しまたるれかくたんりしくごともうりまもぬま
きになりて諸ぞ庵りらいとあし二葉れ松乃末代か
末てからうしよそへかすりひふにいはの浦にハ高れを
とぞ乃舎の寿鶴といひし女を諸出しんれ兎ハいは
しかにうはるひやま花月ぞふもゆしことに松原がし

なくなるもつらき紀名趣やとゞまりの所り定なくなる所
ほとなくこまる町ふ命しよる日のみすいハ丁乃紙あ我
をさゝやむ町たをひ乃ほとりの門よりはんれやされく済
はの町つまそゝる町にあらみの袂をまちせん
と地をうい乃々大王所貴哉れもりしを松をいひ出山王
権現へうしれ附まいりを体るうるき道にゆきまりいをて
まてもいりては道をれ〻へぞうされをとりつとで遠侠
か立あらりなんだいふとひとも寺れ御果なるべし我ハ花
理母乃若乃を蓑ともとんせい浜らいれ男とあり安国住
寺あれ庭山れ奥まで行脚して荒生寺哉れ大名織
なり七日なりハ名をとるの家解脱抜若れ去あうしてらの
へてやんとやけ々踊る我ものびあり大名上手て我を
ハいうるものとやまふだんかうしけをくも保和天皇よ

あれ血すじをはなれん是非源氏の性絶つりしよしなれ
ども武蔵の家に生れながら矢のこゝろてはかへらじと
もわかくしておちこしを岩倉山にて服にそみ死しても
久ハこどりて子を迎へしくて弟劉なる侍にまして犯やる
ためにおのれ殺めしてみずからおさなにすぐしてなぐさめと
ぞしらしてぞいくばくの女のをさなくそれもまたもつて
あはれなるとても加らしてもうきむすめの果今ハ露もわかく
すりつるおもひとせんよりもはかなしこのうらみてもなれども
ゆくへしられぬ見しよりもやさしげなるいまざつりて今の
ぎやうひの声り修に別るる教も遺偲も後の世も見残して
かげなりけり

地獄谷と云ハ湯谷の今の町丁より天神へゆく所にある

清水谷　梁町乃南尾張中将綱誠のやしき下より井伊

掃部の頭の中やしきの下の谷を云　汁谷より是を出て
に云今ハ紀伊中納言光貞の上やしきのうちへ入る
けれバあせ水なるよし

大上谷　此谷の新町より行さいかちとよぶ所なり
今もてにはさかさこ又ハ非人乃居る所なり

落葉谷　小日向のうち浅利丹後の下の谷を云て
山ハ古昔のすみかし風雨のとをりて北とへ出
あきなるいしゆへに落葉谷といふ

窪ハ

大久保　高田よりハ西南榎町よりハ北西にあたる所を云なり
に七面の明神ありけるこれより下に天神乃やしろあり

川田久保　牛込の西の窪(くぼ)の寺跡牛込南寺町といへる牛
込のうら通へ下るに平安山月桂院といふ寺あり是ハ月桂
院殿とて喜連川右兵衛督頼純乃婦女の菩提所なりし
初ハ平安寺といひて市谷にありし寺なりしが御用地
にめし上られけるゆへ代地を下されて明暦乙未の年
月桂院殿八十八歳にて死去し給ひそれより後平安山
月桂院と号すなり

日南窪(ひがくぼ)　麻布のうち六本木より南の谷をいふ

西の窪　愛宕山の西続寺のうしろ谷乃名をいふ八幡の
社あり

蛇窪　何方ともいまださだめず
須磨の窪　駒込の内白山の前の坂を上り千駄木越
出る口の辺のさたにや

谷八

市谷　牛込田町のつゞき牛小屋の東也宮に八幡の社
あり其の前を流るゝ御堀八幡通り道にて大門の前
にすゝしの町あり茶屋あり此門前の七ツを升けるとなむいふは
氷結の人はひやゝかに氷をなめし石檀の脇小橋前の社あり
二乃門小矢大臣あり藤つゞきは雨八代ほどなり
二谷　とび坂の下の谷也と云今四谷出雲寺の屋敷あり　二谷
村のうちや　かゝる八町を春日屋町と云
三谷　愛宕町をすぐに北へ三やの町なり是よりきたりは
を陽をこゆりでんがやまたの小かぞてちん者へ出る奥列の
いろや　大町の東を出て小東へ十三町此辺また
是を見る境と云けちとれきたに道哲が寺あり拙者
なに淋しきことのぞしてつがかる事の要とこそ　今もやなど

うのころにをつちでうてぬきてつとうるむ子もはる
や古き五町揃ひて古へにかれバ新吉原なり又
ハ小和泉花むらさき八重霧藤雲大唐国(もろこし)とて名人あり
高雄小紫ハ今ハなし格子又は小ざい水小藤戸玉の井
志賀清くるゝ山対馬などゝ云が骨切なり　新町京町角町
揚屋町堺町百さい町伏見町とてありけんぜん河岸
といふもあり新町と角丁のあはひの河岸を羅生門と云
是ハ古き見世あり通る男をはた女が出てくるぶさをとりて
もひこむゆへなりとぞ是だけ地にあるさかとふハけいせい
事かとおもひきれど若衆の其者が内に化物(だけもの)あると
云置きり古文ぬれど大さかなるに合はれしく毛の
さへさとを天井よりさし出して枕りしのさきをし火を
にぎり消し又ハ立かゝさる屏風のうへになりてくびすげ

つきて目白をころぐしし又ハ袖をもてつるの枕はすゑへ大きさ
はかり足をうてきなどするといふ事を彼うちでぶれてす
皆花さ若ともそれだけこのかんとて若衆へ行ゆへ
なんぎれびさぶしき又に下町に格子やといふこのあり
けふの吉原の内ら角町といふまちの中にふぢやの勢州と
いふ女郎にあふこと年久しくすまし中ゐて此ちた
名とといふあけやの亭主ありてせい書をよく久へきて
あるんとれうまつしさに何事もおもふことをねてきる
その夜は一夜は角町の小若狭(今は小紫桐)　三浦の坂倉
江戸町の小さい書(今は市野)　勢州と同人なり
江ハこさきしれの実かすみに向ふ表の月かさもしく影を
今もなく書院の奥にてさし入さと吹かすれバ風に
ほそきて人の梅かおハまり人の香にあやましく思

んちうくれをまうけて女房がだんだんたちて又花なん
どなら見所ちかふみるくゆそろひなき所とある人は
まて後もこうしめのそけし所をあがさうしにゐて此
ぶみれうけとちやいとゆ家にいくだ男もしらく小俳諧
とゝまて志つくくわつてぬいひ枚さなりしそれやり
なかけつひ契をちろくきぬれねとあひもそらくまて
志けうふあ女ゝ座にさしたるをむせらうしやりてハ唐紙隙
子れさまへつきてさらく久方で出させられましさ
れんかさうしとかゆ子されいなぞてあいさけするかるをも
出見ハ宿丸かてそうじめてあるさ屋へとりて古希くとうふ
ろも利ゝろなるとうもうちしかしまするゆへりますゆ
なんそそれくうハぞうけしまん思いでたあるさ古ますとれ
むやしたく脂もるて行うつきもれさまを見ハ無事も在

をとり川ら帰く志りハかさりてへよるそよしけれ此果さそめ
んもうれさちぞくくとするに披露れ白乃ゆ床ハさてに
とりましさ古多さ人のハあるさになんじくけんひとの古て
いへ尺をうぞうひしまやかさる念をうし勝手のひとり下に
むかりよるれその引かをゐてこのむうちに枠風かととへ
に人へつまとゐてきゝありなひをしやかまりましさうとく
やすま希りまをいまうこさうこらなとしある女しひて社
に経よ風けなさしいひつけてちんで此座へ入るはのやそ
ハさうるれあいさうまへかさもちかひやぞ帰もとうつ御も
胸がどりたまいぬさんでかけし得さハそうもいまれね経風ハ
久しきなうじるもハ希さがそうにとろもさしあをれうる
比るのありうもちてくしうにくらしいまけ志さいらしい
うらえなし此るゆつゝいきじねかしい名ぞろもいふそのられ筋

列か云久しきでありしとかくふられしきたにはしきかけられ
してき御しさまでなしばこまいてありさまのをしと云樽ん
出かり小もおもや〳〵ハうけがあつて皆来しぬときいてさか宿に
もやうそが皆様かやもおもや乃やうかうけハなひがいふ
てりつねしとやいつし酒によハきやれたそうる所とたちと
やうを御亭もとしうの盃をさとめバ樽屋ハしろしく孫か
ちりしくけつて せいしう大こうとあるもこさしやれとて樽
屋つにそうくといゝどれもくそうて目をむきてこう
れハ婿の道のいかさ御ほうれ大さ三尺八寸もあろうへさう
あんどんにまをうらうけ目をとろくしとほそめなるさき
きさを盃くといゝやしてのきさうにかり酒樽屋も一
目ころうもと盃もたまりのみ酒をとてせいきしもおますて
まりれうとうふなりそて やきぞけ盃もと大盃をあけさ

んでにびろとて頭にふしきるかずろ乃男いまのばんきうまそてこ
かえむいさハ三寸れて目をはなしてまりとするさ出さそ
れぞるきめきに枕もとの屏風かるめされてあんさんれきえ
ち孫へハ火ほこきて孫やハまいくろなり戸口もいます
まてあそこへつきあとりちろへゆきおそうらうちも
なくさりく小宰相小けりさがとゝにてハ何れまけハちろ
孫とあかと孫きさまれてきんそうくといふ変たり
こそ久公様十三郎七五郎かんぞいふけりひとのれとろさ
樽を出させてちんつけうとしむまれぞもふれ相や樽
樽屋ハいふ和そん次とちりれさひやハかとりそうつて
うきを持かる孫やハ一両さしをさけてなきうくと云あと
やハまをひうきはぬやハそいまうる弁当やハ火事と男
てはるべき酒を出れ樽やハるざちやまを出して負ひてゆ

せは、ころさやハみち芳乃山本のちかにゆうふもと云あり
んかをしたりける川かと次ととれることのんか
四谷　糀町を西へ出て四谷なり　糀町ハ十一町目十二町
目今ハよつやの見付ハ清水門と溜にあり赤坂へ町屋
引て溜池ハ寄池を下にゆへかし町十一町目
十二町目より四谷に至
谷中　志乃ゝ次ハ池の東ハ東道上野ハ下を通り清水
ハ稲荷を経て上野ハ山に添さ志ハを与ハ池を
前に向へて稲荷あり太田道灌ハ建立といへり今是
しき事ハ江戸名所記よりあふ暗く志れをとすの池ハ
東さるとはいへりハ門に入ぐいなりハ社前をすくにの
ぞきハ上野の隣つさごとの前へ出ると上野から此道下
東ハ池のそこ弁才天へちりしむし此道真別海道と交

よき所みた川へ出しとや是より此道より上の又寺此池
を備て西ひろ見ゆ今ハ松平大膳のやしきの前に
谷向ひハ見ゆとぞ
むかし野乃西ひハ是の草なわ根を堀てもあつまれとも字
夕附日むかひの岡ハ千すゝきまるは淋しき秋のいろゝ哉
かやうに讀しハ此所といへり二流ハ小路に従ひて此先ハ清水乃
いなりハすハ江戸名所記小志る千坂に是を添く清水の稲荷
ハとに清水寺と云日蓮宗ハ寺なり是ハ江戸平川口にあらし
寺と太田道灌の子源六と云し道灌にささへ之て平寺
設名を法恩寺と云此子の菩提のためにて此寺を建平川山
法恩寺と号しけると平川口より柳原へうつされ柳原より
此地へ移されしなり法恩寺をさきに大にゆくハ感応寺道
谷中　浅草百人まちハさん

雑司谷　此所の在郷の日蓮宗 雑司谷といふ 此寺
は法明寺と云 六老僧の内ある寺は東陽坊と云 本堂の
うしろの方南に鬼子母神の社あり それより茶屋あり
七月十六日の夜 当寺の前あたり毎年 相撲あり 近所の百
姓大ぜいあつまりてとる也

下谷　神田の明神の下 湯島天神の下 東叡山の下をいふ 下
谷といふ

比々谷　虎の御門幸橋の南をいふやうにいへり 此所
則比々谷の稲荷といふ やしろ 桜田へ出る
御門を比々谷御門といふ 其辺より比々谷の
稲荷までをいふ 比々谷 中にあるなり

千駄谷　青山宿寺通りより本に行 田面を隔て西に有

世多谷　吉原やより古戸所へ出る 所をいふ 行
所は むかし 吉良家十五万石の領分の地也
といふ

碑文谷　目黒の池上より八幡の前にある法華
寺と云 日蓮宗の本寺あり

指谷　今の白山の下 小石川築地の山の谷と云

川は

隅田川　世人若川の古橋薄草川乃上なり三月十五日梅
若丸の命をうしなひし人多く酒を飲ひいさく業平の名に
しれて名におもし此川に都鳥をよみしといひしとあり
き鴨の翅はさされる鳥といへども都鳥は今は見ておほ
けれかし都鳥といふはまあの事也そしてあまりは
きれども鴨とかいはるに相似てくし白き鳥のしられ
ほさくら川ひまの名有りと見へし人は遠藤が云酒を飲は
詩の席に立て唐人なるは霞風の事は生きさうて我
は家の庭に臨みて歌人すなはち古今の三鳥乃大事なるを
そしるてけ都鳥の事をも志れ侍る物語の名歌をかたる
は此類はあるまじきとなりて遠藤がしむ
添しき節に人々といひしとつ此し鳥作りしてれしつよ

一 こと問はすみた川 尊仁親王東へ御下向の時

隅田川都のつとにまゐらせん其名たかしあかぬ詠そ

御自筆を掛物にして木母寺にあり 又近衛殿の御哥

むかし人跡は桜にたちかはりあはれをことゝはましを

これみなむかし此国の名所なりけれはとふらひ川辺

此御哥も御自筆の短冊あり 其山長嘯の哥

こゝろせよこれ東路とかくありけるし角田川原の渡しなり

是ぞ家好かうた

涼しさは暮てハ月ひとり角田川原の夜のさびしさ

源光広のうた

隅田川ふなよそほひも早くこゑ一すじに秋の夜の月

建保百首に順徳院の御製

おもしろき宿かりてん言問の角田河原の秋の月影

いほ崎とは今の中の郷のあたりとぞ むかしは入海にて塩

干のをり渡りしゆへいほ崎といふとぞ 万葉集

には廬崎と書て紀伊国とし 光俊卿の哥

いほ崎や角田河原に日は暮ぬ関屋の里に宿やからまし

又聖護院道興の紀行に

なかれのみちに関屋の里もちかき角田川原のあかぬ詠に

関屋の里の事もいはまくはしくも聞す ある人のいはく 木母寺の

西にあたりて牛田といふ所あり そこを関屋の里といひ

ならはしとぞ 此牛田へ淡雪入道といふ人のかくれて其庵

をむすびける

おもふぬるとはかりて集にほ月もあかり花ちるかな

としさるゆへかくいはれたる牛田へゆんとて庵

めりまとへは木母寺より六七町もあるへしといふ所には

扇めすも塔にまかせてあくに面をかけりて長き橋の
又あらはとくはあまみんせん善れ大橋とたしゆかさり
なくとゞくも其ふくりしとあるをなたるに流し出もな
かれハ旅よりあきともいつすり日ハやゝ底く篇わりかれハ
遣係かしむ
ゑ流るをみてそめよ扇様や閣屋の里に日ハかれよかり
角田川ハあり又あきハ九月十三夜の月やゝ底く光わた堂
て一色に夜月蘆波流くそり遣係かしむ
角田川月もしひのかみしわたいさしくんいわしへれ孫
陶と妙ゟ離していよく玉葉集に
ふとへとこなへぬ月のすミさ川秋のなとみるかなかし
とかり同しまみやしいへ元遣係ハそのみハ志るぬとい子
須田川
角田川とい子も須田川とい子もまたけてかなし

流しと云も様まし流しあり角田川木母寺も須田もしかれ
うわし須気れもしとい子ハ隅田川れ流る見ん乃かりしに堂
木母寺ハ堤乃あとし経箇のれかさふ
又雰ヲ須田の流しハ見てをとも旅人をさ子聲ゆかり
やよ経ひしを橋場の流し此事なるへしさて橋場と
云ハむかし宮古も今乃あまそし此やうに橋ありける
ゆへかといへは遣係かい子いかもはしれありつるなり
夫木集をみるに先儒のまんさに
角田川もりしハさりを今ハ舟ハ角を渡橋乃ミ舟なりけり
とありこゝいへは隅と妙かいらく須田れ事角田様まし事
御下し角南と出て十ちもし須角田と来てすさと須
下しと利口とい子遣係かい子万葉れ家にもすみさ川
とあり宮をするとい子ハまよみさを中略していふ事也

よの人ハ海を舟と云ハぬともそのいはれハ梅若丸の母の舟
をなげけるより以は舟を渡しもろくあれハすミだ
河としとてさはぬ　夫木集　基綱の比分
　こゝろくとすミた河原胡桃ハ舟すゝぐるさや流るらん
下総國葛飾のうち
　さむ河ゝ日舟すハ舟かゝるあすミた川朝霧にとりまれ比すゝ
れかゝる舟の色なりけれハ遺保かなむ
　浮橋も絶て程なき舟と渡田の渡りハ跡もなき舟
浅草川　すミた川渡田川浅草川江戸川ともいふ云
よみて浅草の花のさかりを上ハ清洁の名も東の事な
し花のさかり下ゆきてハ河の流も清かるべし
江戸川　江戸よりちかいのかはらと一丁あまりや善福寺
の池の水も落入るを関口村より西の下ゆきをせきあけて
江戸の西道十五里余にて
玉川　矢口の渡りより六郷の橋の下をながれ海に
　玉川のさゝ浪調布ゆかしくにむかしの人の恋しきやすそ
建保百首のうち
　日にみえ風にみだれける光るも東にたち玉川の里
　てほすやさらしの布をつゝみぬれども玉川の里
　玉川にさらす手つくり比交まをかなしき日のけれ衣をさゆく
遺保かなむ
　まそかきハさらせ布とひなの黒根を離り玉川の居
は玉川とせしよりけて江戸の道乃ゝるゝみよ今ハやまり
てたる川よりけは矢口に新田大明神の社にて別当
ハ長福寺と云山号をハ義興山と号し新田義興
の木像甲冑を帯し茫度を常せり　新田大明神の事

は大井紀にみえたる事へに明らく社のうら流れ音羽川
節さ今は瀬なりて社より西の方へなかれて社の後
に義具をはしめ供して在る所のものく流をあけて
一つには両方堀をつきてあり又は丸く一段高くし
て竹藪に社は東むきにして前殿もすくちいさき家
やからのたくひとられん由緒の人々の口ずさみの詩歌
ありこれもつたへて清き所也

玉川や志つらし波の花をゆふかけて流るる水に神も
涼しと一首侍る歌なりとかやいへる人侍りとはいへとも出
るてきたく東しやしくむ

やりて後光寺にみゆる玉川乃白きあやはれたるゆふて

宇田川　安井池乃辺の在家下南に落てあさ所の下
谷寺の表川をなかれて宮小落るあたり下の在家

くの下水を落とむゆへ宇田川といへしはすゑの
川乃やうにもつたへ遺とも水上はいかくの志とし来もな
くそのまし決へ落遺は宇田川の名ありへき事とも社を
立る此町小宇田川若葉といふ名をこけ名の起よ
りけ町の名をも許とゆへ宇田川町といふ宇田川橋も准
へ

わうさ田川　新堀山の下なるを今般へ替りて

旦戸川　清水川も今戸川といふ所なくへしむかし清瀬
竹瀬の旦戸川みして漢せし時清草の錦着細き川とり
てわうる世をふ川とされを今はやと川と唱ふあやすり
瀬へし戸の字にこれ来ありてさのまみをとやさ川
と二字ありしよき小流て雑多しみやこ川といふ内は在の
字は新またる戸の字を書くまし事はいてなきとも知り

にもすゞ文覚し船ハこゝやこ川といふなる所なれバ
へけ川ふもとむかしをみやこなるといふとかく候人あり

永代嶋　嶋ハ
八幡の社ありけれバ地に戸をたつれ宮居建立なれバ
参詣の人もすれみしく侍れ門前繁昌す人々次第に茶屋
出来て町法度もゆるやかなれバ八幡乃社より東西
二三町かうちハ皆おほてなかへ茶やあまく行きかれ女を置
て参詣の群れなくさみと次なんほくまるとなるとうち
と度洲崎乃茶屋といひて十五六二十斗の女共をあまたかゝ
へ揚をさせけれバ十人なりともかくやかれて酌をとらせ
小唄をうたハせ三味線を引鼓をうちてのちハいざなひなん
とて富岡へや行給ふより松坂越て深川のけこれた
川ちしらやさ富ふひとり川のふとれがうたるかんざし玉箱
子をわたしてかとか風流なりし三さ程女も流女を
[illegible]宮を通行る茶車屋れおきんかうえんれけさうや

おなすみやのおもうすましやれかかんなとは様地宮
しやらふ

佃嶋　すみた川の東ちいさき嶋なり　住吉の社あり
浪人のすむ所也　此住吉の社へ重広といふ人住吉
大明神の十一字を一首つつの句のかしらにおきて十一
首の歌をよみて奉りしとき

す浦霞　すへとほき浪路に春の色見えて
　　霞乃みなわやあさひなるらん

み納涼　みそきせすはタなき涼しすましれ
　　浦をりけせは松濤下りけ

此末九首ハわすれし　又前膳法師の遺述院実隆公の
住吉の納十首乃歌を以て添へして奉りし所
うらなへしは

よ上月　よの浦のかなれてすむ月や
　　みるれそのまでいく秋へん

恨絶恋　いまそしか恨ひともみせそ
　　絶しやたえんかよすかりとは

牛嶋　浅草川の東今戸村のむかひを云也　牛の御前の社ハ十七八年以前
まてハ丈四方の小社也しか波羽馬桐如の住し宿もなくや
と旧跡もなく一ねんの寸板の上に古られる所ありしを
せて庄屋は草生茂り年々人もなかりけるか今人の往
居ありて今ハ家数もさまれいふいくら庄の者ともを面白く
まれなくさみ所なり　角田川又ハ銀杏壹へすみする所ハ
此嶋にて毎日つけく幕を森のうらにうつてなみをも
待てうへより牛御前の辺ちかくしへ近し

柳橋　右ハ亀井戸の天神よりハ西わけ村北新田と云
所を柳橋といふ事ハむかし此所に柳おほかりし故へ柳の
丸を角田川より葉をとりはけ村よりも柳を植てありけ
植しと云かの人の名に
ゆはり柳しほれぬまと哀をいしたる

三川橋　名ハ此ゟ東今坂村の西ゟよこれ所今ハ天守書所も
氣の富寛元見楷乃此書院ハ　権現様此所より先ニ三河月て
武様名三十石此田地を我とたまハり此所の時ハ御馬を引さけ
て御供いたしてより其志てより者ともの子孫なり
権現様江戸へ御帰りあそハし日を追て御威光かゝやきし
時小なりて右此者共いひ合く三列の田地を捨て江戸へ
移りきたり是に依て右の者らへ此所ニ於て御知行を下
し置なりし故へ右これよりも三河橋といふなり

霊巌橋　八町堀の東よりれの橋をまいげん橋と云此橋より
东の橋をいふ南かへハいなり橋を渡りたるはしをあゆみの
らハみなと橋を渡りての地皆霊巌橋也むかし此所ニ霊巌
寺といふ浄土寺ありしゆへ江戸にて傳通院霊巌寺
院とて三ケ寺の檀林なりし所の寺此大火事ニ焼深川
へ地を移されて今ハ松平越前もれやしきとなる

堀ハ

新堀（にいほり）谷中のほとりせんさん木林の下や　七面の神まへに仏

棠をめぐる寺の並るなかにいほりをむすびて名字を人給

得しておもありありて近くに来れるたるとひの

ほどろを見てれ上にもかれれあるれ念を誦て夜の北より

どふかもへ水の下ふちいされ窓をあけて出てにいぞく忽

に法華経を乃せとり　西北くにもびはすとまへて朝と

暮にれたもけのまてがとるに俤をすまゐうちやすまた

里湖と謂ふいひきるは我党にいふ抱宮因の弟なれハ家の

道も接すといふ者あるぞいふ人かなをきて高道をききめるに

今れ人なましいに学をもと友道を油なぶといひてれを

ひいかも苦なりすりしてるがちく偏舛をとつて利計を

上手ふたくみ道にいへるもとも惟幕れうちにかくし

勝事を千里の外に決すといひ百度戦て百度勝事ハ
善の善にハあらず謀ありてはかりことありとて敵を
ハ謀れハいかれるにあらずとなんど聖智有徳の訓斗に
して盲者の目あてにもあれバ今日乃用にたゝざるゆへ
し正法以て敵に合て奇をもつて勝といふ正を以て
合ともとはその時ハいかなる物ぞ奇を以て勝と云ハ
奇乃すがたをいかなる物ぞ敵にも奇ある
物なれハそれよりの人ハいかなる物ぞ味方ハいかれ乃
士卒あり物をいつわれ凡人あいてその聖死めるその
先きのかさむきその行き方きかくて云
備へか又云われても其物が如れ乃事弱き人あまく
又云くいひきかする人も明し今日にて
かりかれの事中ほれ下表もいうにて此人とも此物語

然うけ給はるにハ亭主がいはく軍法に三乃さいとて
三事を仕わけされバ備乃一つなりと仕様というハ人の
そなへ常々乃さいをいなり人をよく見ぬいて備拝の
者ともなくせずけものゝをもちて法せてこれくの仕
其役をいいつけ上の人下まで通し私なき様に
まうすに極めりけれバ主人其人の分別又ハ分別と
いふハ好ましきあるを云んに善悪を存しつゝ其て敵にむ
かいてその利あるをいふ事ハなし室をもつて信を表に
あらはしから法備立と云三法乃御家にあて勝利を
うひかさ法定といふなり是等ハ大将の守事なるハ
此それあるハもれしつゝ法はしれぬ武者大将より下ハ武士
ハ士卒といふ法をしるべし士といふよれハ卒士乃法
かり兵とこゝろハ兵杖をとりての用なるべし 常ゝ今

経行して凡の吹ふも雨の渡水をも渉りして出す地震の
時も枕にて我が心を励しすべし百人のうち剛の者
壱人臆病者壱人詠ミて九拾八人ハ大方剣も擬し
それゆへ人を経行し頭々にあしなみ守さ也と編
なり備とし一備を頭にても又一備のうちにおゐても
又ミとて大切の侍なりなとへ生死をあらひ口も毎言行ても
よく守れも心を随ひ其後侍の分別なとゑする人ハ左前
の上者よ乃利非勝利の損徳ハ花をも見を以ても
能々人心にて見るれおハ清る物也されハ野山海川を見る
にも心をつけ分別の場所くハいつれに働くへしや是
案さねと道具乃長短馬の大小さし物こそるの得
失も其のつるしきうく心をさへ平生戦場生死乃所
になりぬしても敵よりいふハ敵の向ても敵の

しられくるかさきらいなく兄をへし此数のかれ亦を
兄切と云大切の所し勇剛に生れつきたる人なりと
も心の強弱なき者ハ多くの取ハなきぬ物也是に依て
少事をいふれ共まして筆にはあらはしかたし
一つ二川をいふ是の急にてあるれとしもになりぬへし輝
虎の作りうか軍をまうさすといひ又小条左衛門
の変が勝そくといひしも是又一つのさいといなり
軍ハさわひをまつ一とす大秘事也兄切のひなくうちが
小体ハさわひぬくあなりあらし兄切たらへしあらハ討
死すへしと定る所が定人取の至り刻なる武士の働き
あるへしと候る

八町堀 一町よりい同人の屋敷あり候と云松本町のし此堀小南へ
八町あり故し松屋町よりも首筋荷橋まて三十間筋のあひ

を賣八町坊といふは先年まては門かすと云は雅所居に有
了然尼と云尼ありしは東福門院に召はされし女房
なりしか女院かくれさせ給ひて後尼となりて了然と名のり
謝て大山乃出家を師として禅学を修とし此あはまん
ありて鉄牛和尚に法問をこころみんとす然れとも容貌
美かりしそのころみやひやかなるに依て鉄牛寺
門乃出入をもきんしのそきかねまする所へ本庵禅師
先年子白翁和尚乃弟子也此庵へ行て出家せんとて
乃そむ白翁のいろく仏法に心をしわる程ハよしられ
美なりしと然このますむ容貌をそこなふ事なりと
然かなら美なるにましにうかうかしく流くわりそのとき
ありて寺中にわかんと世の人まゐらせ申すあやまし
されは在住なる事へいるとて寺中を遊子る然わるしなく

出て遊所乃町屋へ入志かく此事終いゐてそこにありける
鋼れる同とりのを火の中へ入そのうちもとし机をあ全
付やうにさしり右此わさ孫乃あつく焼さきをとりてひ
たひるをはし終え顔のうちへおしつけてさとく色
顔を損さして翰筆を有て

燎面皮頌

昔遊宮裏焼蘭麝　今入禅林燎面皮
四序流行亦如此　不知誰是箇中移

いやまれほとしくやかのいかりかくし終れ顔をもてなさりせは
はる然望ほと信従て給へ小すま取れしせんとて出立
ますさて其庵人にほれさる遣鉄披庵へ行さ
に彼もっていきな人ぬしとおそわりり頭入をも出さて
氷茶れきまれ人よし若き里をは来しに行為りしをて

とありしは了然にかきて

一　これ今の作者思ひ見れはなりとてむかしつる世にて有る
相坐の時にありて了然かきゝの一つの書状に有し
是は此花にて嘆き給へし奇ともなりとゆるさるへし
けふも是るぬ難波津の浦あれハ撰見あれとも猶おもわるゝ
我目ひとりまさんに見にかれたるふかくて後此形見
也は歌にとてかなしぬこの書をかりて志ふ弟加ふる
此遺侍の奇特もむなしからんもみえして我名を以て
世に残へしと自慢の作へなり

了然尼禅　形見

聞書歌

春霞の海を　　有馬重広

今朝も又みえぬさかひの霞すも宿なりし春の空ハ作り

源家花瞑法し

葉守の霞と今朝は立そめて春をしれる宮に志る先

山名光豊

佐保姫の霞の衣いたくそめてみよりれ室にあさはかすまん

清水宗川

世をはなれ心を明ふ居のうへにみえるもめつらし

孤島霞　　岩本宗好

朝日影の浦の名ハ遠くなみの霞にあかる松の下陰

海辺霞　　桂林寂仙宝

潜出しふの入江もみえて夕むはなかまよつり船

山名光豊

月前霞

晴ゝるさ風も春立朝なくとおもふのゆく三條の松の

一 うき世とくはやかなる人さき雲の上にと松月のなかゝ千すむ気のか

一 梅

田村宗永

はる人の庭も果ぬ月のけふにかをり香なる野邊の梅か枝

由良

梅か枝に春雨ふりはさそひ来る袖も今宵て花乃下つゆ

伊達宗利妻

人々ならん花の色やちらん霞くまかの花にかゝるも谷の香

春雪

有馬重廣

天のつゆ白妙の見にふりちりていろさく花の香のあわ雪

初花

中川重興

色にほふ花の朝露の香をきはさのふかきぬ枝の春風

花初盛

新庄直賢

咲初る梢ともなよしのゝ花のさかり色白に越へてえん

花乃かほ

圓覚院隆恭

あかれる花の色ひを墨染の袖にうつせ庭の春風

花留人

畠山義重

久にさへいけとも行ぬ山はまた花の色をみゆきも花とませ

家とへてきたりて花乃色やとみしきけのとる

後人卜次

いさ又そはい花をおもひをゆつり庭て我も国とるれ数なくなん

春まつ山おろしの瀧れ春もうし尾上の春れ花なれ

田付直平

行路花

久にさくと風よりちるもちきりてをみ花の山ゆくなる

安遠

月前花

咲あまる庭れ櫻の木にのるまりのるとくに夜も花まさき

中川久恒

詠落三友

雲らふ風のをとも花にかくれて春の夜の月
さしもまた人の野辺ゆく若菜摘し時のことゝのみかな
やかてまたおもひしことをかなしみ出つゝ
宗恵法し

いかにせむ今年は花のさかりさへ世をうき雲にちりやしぬらむ
花のうさ
讀人しらす
花さくの山すそやかすむ香にたちよりぬ枝とはうつゝなきかな
おもふことなく花さく人のこゝろさへちるかなしみはしらぬなるらむ
おもひを中にとゝめて吹く風も花の枝をさそふらん
風吹はうきにいつはりをさそふ花こそつらきものなれ
さくら花ちる風の一すち道をたてゝ花の掛橋
若ゆける花を惜むとて吹かへしつゝ山のはのかね
吹風に惜めし峰の雪まてくもるまて落る花のゆくへそ

落花
田中寛格
よしやちる花をは風のうきになしてうらみぬ花をもさし

帰鴈
中根
わかれゆく雁はよそなる花にそやすらふなれは

河野通長
かへる雁のこゝろにかへるさそふらんまた花のあるまて

常照院
かくしつゝかへるなる雁の声きく春にかへる

蛙
原安適
さかりなる苗代小田のかはつなく声もしつかなる

一 夕蛙遠
田中寛貫
すゝしくも霞む夕暮の小山田にこゑはかりそきこゆる

暮春　　　　読人志らず
春にしく行かむもしんいけるはれ見もしらぬ春の名残別路
更衣
きのふまでも衣を花ぞ見ぬ春乃昔の今日よりは夏衣かはらず
古後山梢まで緑みて新樹花に勝るといふ事を
人々読侍り　　　　小山守中
おしなべて花やハおよばぬ嫁のかみちすかしな庭の陰　[illegible]
新樹　　　　読人不知
夕日影うつろふ色乃みどり楓そめぬこそ秋も秋ハみへなり
卯花　　　　松平昭重
雨雲もさかのぼらぬ月と見えて世のほのみすに曇る庭の卯の花
待郭公　　　　天方信道
山ふかく夜もかりもありしゆえるにハ時の花もさかれ
聞郭公　　　　山名非豊
ま川里にあすハさつきのまんはゆくに山ほとときす声すみなく
　　　　堀田一鎮
ほとときす君の名をも花の名にかはまとハせ侍夜ぞ聞き
関路郭公　　　　浅野長治
一声ハ越て記すものやなさや関守やほとときす
古寺郭公　　　　奥山良和
わしたうんあまて郭公月ゆく入りし初音や
暁郭公　　　　永濃
かくこなの雲のいづこの一声をすぎしもひなかり明かり
　　　　白井伊信
おもさなれる日かれて老らくの袖見て掛ほしてす
五月雨　　　　蜂須賀光隆

ひの川八十瀬に落てゆく水のすゑもしらぬ五月雨の比

瀧五月雨　　田中定賢

音ハ猶まさりて落る瀧の上の山も見えぬ川さ五月乃ころ

夏月遠行　　永井正次

ゆきくらす籬乃竹をとふ月乃かけ行川に倉済るゝけそ涼き

夏夕　　大澤基治

ゆふ暮ハ月ともいはぬ露なれハ空澄まさる風にうちとて

夕立　　田村圓方

ゆふたちの名残の露の玉ほこ月をうけ出る影そ涼しき

鵜川　　鈴木重長

入月の影よかりて大井川さすや鵜舟のせゝのかゝり火

泉　　田村宗永

すゝしさを岩もる清水の音きゝて日かけすゝしき庭の秋風ぞ吹

納涼　　加々美家成晴

すゝしさハいはね乃松の風いはの音のそよき吹けはからん

橋　　有馬重廣

すゝみ来て御車わたす下露もすゝしく月見る方の川風

秋ちかき夕　　井上正利

ちかき夕の雲の行きかひも猶すゝしくもあへる秋をかな

　　山名雅豊

みそぎせし川の瀬々の音ハまだ夏なからそ秋の初風

　　秋庵三友

荻ハ根を袖にまされて露けるゝ見にしらする秋の初風

七夕　　奥山玄扇

天乃川いく秋かへし契りらんまちし乃橋乃絶ぬあふ瀬ハ

　　板垣重治

さらのほる夕ひの山は夕くれてかりとぬ雲まもその始なさびしさ

菅沼正氏

霧こめて幸山の末をもとめくはらのかけ路のしき秋の夕暮

遠近秋風

松平昭重

一むらのあさぢのしのはわかれて荻ふくなる風に○の松かせ

暁荻風

田中定賢

ゆふへのはいかで徒らん寝覚てはおのつからなき荻の上かせ

松虫

清水宗川

はなの野をさもきりはてぬ野山にも霜にわかるゝまつむしの聲

深夜雁

田中定賢

文月夜ハかすミも衣の数さへくもまてに落るかりの声

寐

よみ人しらず

なに瀬やからころもゝ夢うつれ枕ほしかねつれなかくなり

秋山

岩本家好

夕日さす竹乃葉山の村もみぢぬる色さへ殊にさびしさ

秋夕雲

かゝ家の岩勝

吹のこせ風もしばしの峯の雲かゝる夕へは秋さまさなる

月

読人不知

みなもより嵐夜風にあくかれてまさ神路乃三ケ月の影

かく秋夜の夢すれ上なる枕にかくしけり月をふかき

武藤安清

みえてゆく雲のそなたにすみたる秋の月のかくれてひとり見えゆく

遠村秋月

青木泰隆

ともしびの夜はいかなる月かけに深きわれやそとろはゆふ一むらの里

閑見月

中山道軒

あはれともつけさせしまへれぬ常よりも更めてよもの月の光なる

八月十五夜　　吉益豊滋

去秋の十五夜をともに待くすれ縁ありし月の前にのらん
源光豊ヵ許にて八月十五夜停午月ともに
ふてんしく哥読侍り奉る時

有馬重廣

かはらぬ世をいかし今ぞとたのしまん秋の最中かかる夜の月

山名光豊

秋も月もまさりけりけり今宵に出ぬる鏡乃光とのこして

清水宗川

先今宵あふぐ天のはらすむ月乃称れる今もの千代に見ゆ
八月十五夜人まり待寄る夜人ことさくり読みて
月の哥読侍りけるに

川月

細也家茂睦

頼みぬる心やあさの名よう川月乃かげを堤本にしく

停午月　　原安適

小夜中に今やうるんすむ月乃出今ともおるし夜ぞふけさ

九月十三夜人々よみてうた読侍りしに　　山名光豊

名をめでてあかぬ縁も新たしいにしへ遊中乃なる月乃光

擣衣　　小玉某

秋さむし新も擣衣をうらむるごとくかりなるとも

田付円方

よをさむき声つゝ月と縁むすべてまさら川志縁も

寄遠菊　　大澤基治

白へ根の名をはつらて白川乃はかるきしにまてみちすゞく

菊を植る

雲ても嶺のこゝハあらくまたこゝろもさひし庵の白きく

暮秋　　つきん

くれもてハ行かさとゝの草木家今より秋のかたみなりして

風也

定まらぬ世のならひとやうき秋もさてさうなる又おもしろん

よし人高和

行秋を吹風まつれもなし山とふんて今ハ猶しもしたひ宿りま

初冬　　忠宗好

冬ハさぬ行の山路くれるみに深くのこれる冬さそひき

時雨　　有馬重廣

夕嵐菊の上ハ露ちりてし空に時る袖乃月かな

夕落葉　　中山道新

錦すれ山日も夕くれの山かけに見えて落葉吹風

霜　　久松定延

霜さしき入日乃芦比枝もすきし旅まぬ庵に遊子浦伝

寒草常霜　　回村宗永

枯に乃り霜乃花のこさてあさ乃かけ乃下葉ぬきまでまて

山家冬夕　　中山信久

見し秋の冬ハ淋しくあかれ乃ゝ時るゆふ邊の冬れ山さと

雪　　つきん

花のみちうしハさの木枯秋ももろしに帰りぬ庭の白雪

瑞親昌

浦風やあれ乃八重雲さゆる雪にあらさ鷄鳴河の里

清木重視

山高み広く松の雪うすし夜さらへ見えてこ夜鴉て

伊達秀宗

さゝ枝の松のかしも風吹て雨とあはれさそけく流れのしたて雪　忌部宗好

海邊雪

雪ふけさふりくるとはん庭の面わたまてたれか見えまし　清水宗川

朝日影さすの塩瀬にさしそひてゆきにはれ行浜の松かけ

春雪　小山朋三

ゆりはれりかすみの中ゆも花といはゝ桜かる人に梅花の松かえ

遠村雪　源光通室

一むらの煙はかりにすむ人のありとしられて雪の山さと

雪丸家の中よ　内藤義概

あれせし山へ相見隣ハ絶けれも尾上乃雪に音かへる

馬ハありといふ道へさらしるや森の雲丸雪乃あけかの

よみ人しらす

花なくて入江の濤小春はかりこの山さとのましのみつ雪

浦千鳥　磯田正隆

すまの浦の夕波ちとりさよふけて川や妻よふ声まちらさ

鷹狩　忌部宗好

けふの狩の白山の夕日のかけさしてあかぬ狩場のくれそわひし

歳暮　源光通室

一とせをあふに暮して此のかりや[illegible]の世の流るらん

秋田俊季

こゝろしてはかなくゝれ行年なれや老のまつともきくらむ

清水宗川

わかりにはかしくれも一とせを老てはまた年をかそふる

原安適

家ことに毎年のよろこひをかゝへてさけ[illegible]

教へ乃ほり来給ふとも父母乃をしへ流ゝけり

光政婚

終まり道よりも探るすきハ世のちかちの別まさり

猿のうた　よみ人しらす

なとさまハ哀ぬしも出まく雲も霞もかすミに海まさるの猿人

こゑ見山を越かとて

その松のこちやところ名をさるさる山探いくすもあへんと啼

山名光豊

いくとせの旅の衣もさすか猿なれて吉のまほろしき夢も　とゝつ

清の宗川

行路もとけゆく人を一すちれ見かけふハ猶ほ出雪れ中なる

みよ山つゝきく名残れる藤の花の菊に夜毎の宿れ別まさりさく

源安適

山の里れるのなく猿を啼すそて独寝の人やいはさん

延宝二年の五月八日乃かなしみに待る

松平信輿

かふとなく袖ハぬきかり世中ぬ人のさくらの桜なつ袖花

寂上

おもひきや八千代をかけて祈る道し君を四十年にさきぬとハ

日光新門主

なき後花代のにやしハまこて民も袖ぬらす涙ぬ月乃比

よみ人しらす

有る松千代君まかり来給ふとき

松千代嘉

ありあ山いなの作つゝれく露の風よと海ぬ人そ恋しき

有る乃月ハ桃よあまりまつ恋しき人乃けハと海す

前勝入道子にをくれ侍ける比訪侍るに読て侍りし歌

田村宗永

うき袖もめくりあはれは涙とはかくなくさめん言の葉もなし

本多正昭

露のみれは涙先立つ思ひそ増りても袖乃かはきやはする

又のとしの春侍てつかはし侍

源部良隆

先立し去年の秋の雲の色に今も袖こそ露けかりけれ

妻にをくれて

鈴木重栄

ひとりして詠めし人今はなき哀そひも思ふ中の空

娘にをくれ侍りて

内藤義概

定なき世なりひとりをみとりて人を思ふそかなしき

あはれ何かゝ涙を流しけん

むすひおかん時こそあれ露の身のしくらさの露も玉のうてなに

玉祭して

岩本宗好

書置てむかしの人の心をも思ひ出て世をその名とかつる絃さ〱そ

山名堯豊

人の娘なりけるをねりひかせて

ゆりかれともつまあつく思ひ事もせさりしを

なつかしき事にいひ侍りける返事に余所の植に

なかむくうしのひれこそ侍り参るに侍りける

淡人不知

しらせんや時雨につれて枕にもしたひよる下葉まとひ

恵の家

田村宗永

おきてみて袖にますせん涙川なかれく絶すあはせてまやさ

ゆく人とこそ

又も世にかゝつさいまされの須磨あれされたのまれなる恋らん
なかにはつまる人の母生涯あひて同じ出るされてすさせるや
あらさなくれるとんまれしらて涙を志るし母子をもひい
宿るとみしより後の袖れ月いく重なるこのそこにすむらん
むかしの蝶袖のゐさされ久すまんにほかともおもふぬるれい
あいる夜の移り出ていふ底るれや落とらくくなるす涙み
かすまぬ男に君を待をいとひたやるらゝをくい出るくけらん
こゝのひとより手房女あんとけすある事かさら
つくる時かまとうしらふに文ひるよろ人のありとこそて
侍くくゝつけるを
うらとけぬ契まさへつふな下紐を約しゝに結ひそらい

未言恋　田中定格

こゝしてのとしもはゝくはとえくりて まいらぬ内恋し涙

見恋　田付直平

おほつかな枝のまたしもきのまゝにいはゝふ人恋みるのかに

初恋　本多重世

ういまくるまうしはつまる涙とらる君それとかひまきい

新逢恋　源光通室

なれなよ逢て後のこゝろにそてい袖さへつゝかふ人めを

逢恋　乙川

ながらへてみも今は忘られても忍しに袖の濡るる

後朝恋　友益

帰る袖にさ別て別まるい声さも夜の落まさまし

逢不逢恋　古郭

契りまよ同のさしひらに折はる荻の下枝あさ一夜とは
ましく志ては

・そのまれにありせはいかならん世の中にもそふあはれなる

・恋乃哀れ中に　浅香氏

まち侘てさらにねさめの閨にまぬ夜もつらき涙かな

国枝直旨

世にあれはまをつけくも月になれぬ人はおもて夜はつらき恋しき

牧野常信

玉章乃こと人ハ翻てまされ寄るかき残よしいらしみたりても

立名恋

くわ

さましてもわか名のあらハつかしさりはくさ申てる外に名ハ

切恋

田中宣賢

逢見ぬ身を今へのとらぬそとまれあのわつ逢はりりき

忍恋

清水宗川

忍侘て隠ての情ハ志のそろて見えぬ侘てはりしうらせ

後不忘恋

奥山良和

恨侘なしなはよのに後もせて手まかのそるまのうちさくせを

暁恋

国枝直旨

今ハまてら後乃くさされぬ夜ゆりまきも後まる霜をあきかの

川

とられ待る夜すれくと思ひ置て恨らしるの声さへ嫉き

人待恨恋

清水宗川

なほまうみてさへ堪ぬあまりをいひしらみまそへて侘す

栄恋

新庄直賢

行末をきのしもちるかきりとてはさしかる世に人乃つきを

中山信久り許あくへてあまくくかしれ被妨友

・恋ゆらすまを

田中宣賢

しやんいひ出すなれさらさて[illegible]とゝてかこちし人は

たすし時　中山信久

友人まんまんやさつる行方は契りむすしくるゝるまん

聞声恋

しやけ色はきけとも世のしるさわりたつ中のつれなさやは

友恋　よし人不知

さやいつふつまけなれをのを富士の裾は雲もはしひ空につゝひを

寄関恋　自閑

志つし今とてそら余日を思ひつゝ衣の関よ志ほつて涙

寄雲恋　忌部宗好

まへ流ふなひくるすゝ白雲れ空に見はりなしやことはし

寄山恋　有馬重広

そろすや思ひ人にまおりて見し暮あは家乃山を包まてて

寄松恋　清人志つ波

我まちし人やかこらん時も世への松のつくしも世には知らで

寄田恋　菱沼正氏

ぬかららぬ契りを金にて添はす里山田れ水のかけしも

寄桜恋　平塚良重

あるもての後れに家の花さきてさくらさゑはまたしめたなる

寄硯恋　後藤常広

我ましかおもふとかさき中すつつかすりれ石の命なさむさも

桜町とかふ流は百日座のさらもしはふかおりすり

かさらもいこときちうなすらいまひの一さしまなん

くれしりにふなかれをもひくつけさともなを

あしかれもひりなまさて流りしまれ

まく人は志て流

又見ん海く月さへ清き(?)よるしくも(?)なにそいまへ(?)松あら(?)絶なから(?)

富士を見てよみける　清水宗川

富士の根ハ国をへたてゝうしろもむかひも(?)松(?)雪(?)ふる(?)　榊原政房

世のみの物かハそこ(?)の富士の根の雪ハさなから雲ま清くて(?)　山名光豊(?)

物毎よき所ハさく(?)程あらぬ世乃なかにひとりかの富士の嶽の雪(?)

むさし野

むさし野の尾花をわけて入月をみぬハ(?)清(?)の山の端乃空(?)　田付園方

すみた川

すみた川昔をかけてはのよに(?)何(?)けりことゝふるかな(?)

堀兼井

そこ深き(?)れんのめを(?)たえぬるハ今も(?)ほりかねの井の名ふるき(?)　よ多人宗(?)

まゝの継橋(?)　松平

きこえ名ハ世まかへりつきぬいひ伝へのまゝのつきはし絶まて(?)　森勝清(?)

渡りたえたる(?)世まかへる男(?)ハ(?)の跡(?)しらしまゝのつきはし(?)

懐旧　中山信治

おもひ出る昔かたらふ友もなくワれひとりのみ(?)の老を(?)　佐野綱道

昔かたに(?)海(?)くるしき(?)身も今ハ那(?)し度見のね(?)ひ(?)せて(?)

老後述懐　井上正利

いく世しもあらぬ身なからいつまてと思ひぬかなひそ(?)あさ(?)ましく(?)

述懐の心を(?)　山田教重

東(?)くれの身ふなくしてハ身のうへの憂をワすれてなきいふも(?)　宮部定治(?)

けりましとまて何濁ハ世の中のにしまりぬ世のとかなり

渡辺逸正

林しき山又いる林まいとへとる峯乃庵のすまゐかなしん

まし人而元

おもひそまいく後見やむきうら絶ち清く人の世の事もみるを

国枝直省

こし猶る田をも師ニ屋老をへ何ろ古ろかくも言ろ比筋すし

毛利高橋母

深まし比をやと着らしく人をなれへは今は何ろもわりけり

山名雅老

おりまてもうしをもそくへ猶し比と縁まかしる庵の守り凡

井上正利

よりいり勇る生ひ人の月をおもろ思ひ出へまなしとりにけり

福信何庵

皆やてせの世ひ出なれや惜をおもしそしを勇にうし命なりさハ

山名光豊

暁述懐

せ乃を暮ふかし猿かそしてる夜をあつまさまにぬ老れ鉢あを

久遠思

林直秀

何ろまく物をそ思ふ勇ひ人の門のなかれのならをあれぬ事るれてふ小

雲浮野水

原安適

風ふかれ山の尾ふ雲れ流るやまとつ縁の雲もおかれてそ猶く

山家人も

田村宗永

志ゆくなしもあやうしくはる世ふをしま縁をと思果すハ

源光通室

中の書の秋ふいめ乃ぬ山りるしもまや人の間やきもなし

清水宗川

新ちる紅葉ふりしきつめ松の戸にはふ木の葉もまたになし　板垣重治

淵は瀬の岸にいくよひ流来して菱もうかへる宮川の水　読人志らす

山家菱

世をいとふ志る住はしやこのろハ菱にも人のかよふ宿か北山　寂忍法師

暁

夜ふかき暁にゆくへや牛車まてしくあとゆく方　日永可敬

関路鶏

行越る関をみるこのとりとも志てや鳥の声にそくらん　石原恭民

瀧

落るゆふ山ハ千尋に流るゝ行かれく雲よりとおくのおちた瀧　新在由賢

遠聴瀧

岸に絶えてゆくにれ雲もらしくしきかれしにくさねあつふかき瀧

船　奥山良和

こゝろから心のもろこしとても渡すへし波の小船の風はやけれは　山名光清

車

ゆきかへるや月かけのなかれ夕暮にさかりもおかすや流れて小車　浅野長治

髪志る舟

はかりなくかゝやかすさすて小船よる世の風はさもあらし　井上正利

志らぬ身ハ玉のうてなもたのしむそくの宿のやすくたのしさを　最忠法し

梅花遠

見そけつ枕にしる出るまゝ起梅をも身に寒そ佗てなすさまくハ　天方俱道

志の宿のかをさまくしれたかみのこそ絶えすも梅の花　新蔵三友

寄硯鏡

ちる梅も君かよはひをまもるとや残すも花のかくれ家にこそ

寄梅祝　将監後室

うれしさは君をみてやる末梅のさきもうつろふ色香まさるらん　てらさる

寄春日祝　清の宗川

四方の国のこらすめくみ春の日のめくみあまねき世を照すらん

了悦石記之

君かあしらぬを論し拙く筆にあらはして形見ともなれよ

井ハ

極楽の井　小石川松平播磨守の屋敷にありしを今ハげん寺さ
いふ寺の前にあり　伝通院の開山了誉上人のもとし水を
におりし折ふしとれ龍女の血脈をさつけ給ひしその報恩
にけりをおもしろしとそ

柳の井　同所自性院の門の内にあり此井に化物ありて人
をなやましけるにより　誉ハ法印とて万民のなやみをたすけ
そのころ伝通院人々網三回の前にありしが是をきゝ
その事けれ是をみんあるハさんがためうすけ夢うつゝに
かけ紅梅の水袖を上にをけり今の自性院の山下なる
を夜ふけて一人ゆりかへるにその事けれハその大木の
上にありて大きなる網を下して縄の先をかくし
ここ見ゆれ上へ引あくるに縄すこしもさゝえん大木の上まで

引あげられのこけ物にちからはやいなや太木の枝をぬ
きへ押当に力を入のあとをうしろと引あげ力をぬいて
彼化物を切るとおもへしとて地へおとしおけば縁も除ぐい
て見れば化物を見るに羽々となし里より今は松をとひ
て跡を見るに大きな血ながれより什血をたどりしとて
跡をしたひ今の自性院の山へ行てみつかなる古の下
て血をとまる故あれて人足を以て地をほるに彼だけの入
きなる蛇はちやいくふしてまされたるそれは蛇を出し
にほりの入てみれどもまつりる人形の大蛇一つ死してあり
蛇のだけるあれぞ見けるその穴るをもちらすら水出る
あり井に用ひてくをてのむそのすがたもえぬ底はな
つて蛇の井と名づけて今は不足のなし
塔乃井　牛込あたりの下れ井をいふといへり けふは出よ

里あり清水をうけて井となすされ水なれば出しよりさか
らも菜のあらに入じよどれる夜をあらふにわかよくなら
て白くなるとて遺係が所は此亭にあうさしまれ
にけあめてあつひ逃ころくし村へ道ふかなくしよそわ
らへともくうまれつくそて色くやせかるゝへさ帰るとな
きはすらしもころくなしず遺係はくをそしけるに
てころくなるとは僧やしてそのをさ川湯くみか云ひ
遺係南ゑ山よ火浣布といふは荒の毛あらくれる布し
きはあるひてはあるねらずものの中へ入ぎはあるのある狂な
くきへあるほそれが火浣るとりてされは白くいさんさと
と氷雪のようといへり遺係が縁きもしくあかで
はあ月ましやうて死なれるかのちゆるやまひ又うまれ来る
んとれ白くなる故へとけへば遺係そこしをうちて比

へ竹をもつて我が額に陶しく子をまくらよ竹をそらはる
ほどへ明し光を見せて いとほしなる入道めがな竹のそれなる
やうに膝の上をそらわれてゐんとて枝をさして出る陶く
子南無三宝とおもひ中へ入てけ入道はめいよれからしみて
頭をましらへゆるされよといひてくるしくとせむる道
俗杖にかゝりて ふらふらいひ出せ

湯島乃井筒にさけしほど〃竹が道に落しかみをりと深まに

柳乃井　湯島天神乃下連へ下る石磴の坂の下にありけり
磴乃坂太田道灌の時代へ天神の表門なりしとぞ今は表
門のやうや此井は名水にて女の髪をあらへばすなほになりて
なりけることのいひ傳の葉にてをさけずむそほかに
染もろりくとかゞれあまりくれたるとぞ気脈ては風
新柳の髪をけずるといふなかて柳の井とし名付よう
とぞ

糀町の井　神田明神の社門にありし糀町屋に糀屋あま
たありけるゆへに糀町といふ此所に井あり口はひろからされ
とも底ふかく水なかれてうまくして深さ〆丈ほどは二間
三尺の水をたゝへてもいにしへのかたかれゆきて二丈
出でられゆへうさし比又二丈なくてまさるとしたるとて
糀町乃井といへり

亀の井　神田今の永井甲斐守の屋しきのうちにありし
はむかし茶の水となりし名水とぞ聞きしも広くの
出来にてその札をうらみその名をけ出で今はあし
亀の井といふ事は此井そこうなるにして其のひなき
はならしくならず水をかくなかれてうけてよとなす
此水に大なる亀あらはれ出つれ井の中にうちて中

のこりつたへて昔今に至つて見る人多しとなり

亀井戸　天神の近所百姓の家の門に在梅の大木なり
うつりてありし此梅をうへかえんとせし時大きに鳴る事
ありしよしより続く近年筑紫宰府の天神を勧請し
て亀井戸の天神と号す梅は天神の神木なればは
ち紅梅殿といふむかしより此梅ありしに天神を勧
請すべき志ありし時此天神は筑紫安楽寺より志
んゆうしとりよせの宮へ入りし地に天神を勧請し奉る
うじやかげつかたなき文庫なりしが其後の人多く利益
目くにあらさぬゆへ社より始め所々池泉殿回
廊まで安楽寺をうつしてこれをいまつくりまつり
如儀の社へ内田廊のうち神前を而へ其後の人
乃跡をまもりて神をあく原は神子女有しん

とまるもの多く人多し

池井　源助橋の近所森山氏の屋敷に在

筆の井　昔佐賀町のあたりにあり今尾張乃様御
屋敷のうちの門に在　東照宮御鷹狩の時なりせられし
時ある名水あるよし言上せし處此水を召
しあがり此筆の名あるよしあるなり御ゆへ
よし

紫の一もと
百五十円

書林